

# 鳳翮

創刊号

YAMAGUCHI  
UNIV.

W.V. Club



# 能登レポート

## 目次

不安旅行のすすめ	12	安田
発展する工学部ワンダラーフォーゲル	10	嘉田
発足した農学部ワンダラーフォーゲル	9	久米
ワンゲル創案	7	永沼
はじめに	5	永沼
巻頭言	4	塚原

### △三十七年度夏期台宿

#### 能登半島

能登半島概観	16	永ノ浦まで	永沼嗣朗	21
メンバーコースタイム	17	遠くて高かった吉が浦鉱泉	新内晃子	22
台風と共に北上	18	九十九湾	宮城ヒロ子	24
朝市	19	解放された一日	高木寛	25
△能登合宿感想				
能登合宿を終えて	27		榎子	27
チヨットひとこと	29		征治	29
△能登合宿後の足跡				
紀伊半島の旅	31		比呂子	31
一人旅	33		深川	33



○卒業を前にして  
○有意義だったワングル生活

# フリーワングルンク行動記録

末谷正則 38  
加治忠勝 39

秋吉 須佐 珍道 中 土井 洋司 41

アラリ アラ アラ 小田 典子 42

鳳 願山 キマン プ 楠 本 典 45

秋吉 台 調査 松 本 直 46

北 ア ル プ ス 塚 原 直 47

九重 紀 行 出 崎 隆 大 49

左のしくやぬこがっ左日 喜 田 雅 子 50

長門 峽・萩 函ワングル 小 山 茂 53

自 転車に乗った 長 渡川 島 畑 田 則 香 54

北 海 道 旅 行 記 鈴 木 56



中 四 国 合 同 ワ ン テ ル グ に 参 加 し て 塚 原 直 59

表 備 雑 感 表 備 係 末 国 弘 司 61

一 に 研 究 ニ 研 究 食 事 係 高 木 寛 63

三 十 七 年 度 活 動 記 録 喫 煙 室 S R 同 人 64

編 部 員 住 所 記 録 66

64 14 36 59 56 54 53 50 49 47 46 45 42 41

# 卷 頭 言

主 將 塚 原 直 誠

経済正門のいちょうの水から黄色いものが舞い落ち、風通おろしは、日毎に一段と寒さを乗せて吹きつけている現在、今はや過去ののこととなつた。ひとつ／＼の活動が遅しく思ひ起されてくる。

雨に左に左に、リーダー養成合宿、足にマメをつくつて歩いた新人合宿、風に吹かれ、テントを倒された大山、それから、夏の能登合宿、中西国大合宿、秋吉でのゼミナール、調査等々、象しかつた思ひ出はつきない。しかしながら、我々はそれを手離しで喜んでいてよいのであろうか。否。活動を重ねるごとに台風の姿を知り、その未熟さを知つたのだ。それは今度の役が一足、明確に浮彫りされるに反んで、痛切に感じられてきた。クラブの内部充実を部員の意欲の高揚、これらはわかりすぎるほどわかつていながら、やはり強烈に心をとらえてやまひかつた。

二のようは反省にたち、来年度のことを考へてみると、まず、創立一年目の、今年の特異性は否めない事実であつた。構成員がすべて同じ線上にあつた現在から、一年というキマリを隔てて、来年という時がやつて来、新入生が入る。そこには一年のキマリというまぎれもない事実が存在している筈である。この一年間にそれに相当する何ものかを取得してきたか、甚疑問ではあるが、落君は一年間無駄飯食つて……、などといわれぬように、十分自覚して着実に、積極的に活動されんことを切望します。それはとりもたず、自己の向上と部の発展とを約束しているのです。最後に専学部、工学部諸君に山口とは縁は切れても各支部でしつ

かり頑張ってもらいたい。そして、合ワンのときとでも、また田舎を温めよう。

ワンダーフオーゲルの旗印の下に集つた若人よ！ 吾達は自然の偉大なる力の前に頭をたれ  
謙虚な気持で、自然を直視せよ。そして、素直な温かい気持を持って人と交わらう。

人を信じよ。そして信じられる人となれ。

歩け。歩け。地の果てる所まで歩けよ。

登れ。登れ。そして、星のランプに火をともせ。

苦しめ。あえて苦しめ。そのあとには楽しみがあり、喜びがある。

頑張れ。共に頑張らう。

## は じ め に

前主将 永 沼 嗣 朗

現在、日本のワンダーフオーゲルは、その発生、ドイツのワンダーフオーゲルとは、その意味合いを全く異つたものとしています。昔、ドイツに於て、資本主義初期の矛盾とその大人の世界に反発した青少年達の放浪の旅がワンダーフオーゲルの発生と聞いていますが、私達はそのような背景には関係がありませんし、特に又、体育会のクラブとしてのワンゲルは別の性格を持つべきでしょう。

ワンダーフオーゲルは物質文明と受容せず、自然と戦い、自然にだけ込む事でありましようが、大学の運動部としてのそれは、目標はそこにあるとしても、集団としてのワンゲル、その

うに、各成員それなりの能力を備え、ワンダラーの規律ある団体であらねばならないことが表面に押し出されます。活動に堪える力の力を持たねばならない。自然と交わるにはそれなりのマナーを身につけなければならぬ。自然はあまくない。成員はそれだけの準備をしなければなりません。私達の活動は、自然を外から觀賞するのではなく、その中に入り、ある時は戦います。またある時は融和するものです。

十九世紀には神が失われ、そして二十世紀では人間が失われようとしているといわれます。私達はクラブ活動の柱としてこの事を忘れてはなりません。活動の頂点である合宿に於ては、構成員全てが雨、風、その他あらゆる困難に共に立ち向かい、その中に抜力の偉大さを再認識し、又、赤穂々な人間をぶっつけ合せてこそ、真の反構、信頼の芽生えがあり、とかく現代社会では失われがちな人間性をとり戻し、その上にこそ我ワングルの発展が約束されていると思えます。

觀光資本はこれから私達のクラウンズとなる自然を俗化していくでしょう。そしてハイビル・オンリーの觀光コースをエッセイするには一歩便利になつていくに違いありません。しかし、器械刀による自然の崩壊に比列してその及ばない地域の価値は上昇します。人間は自身の作つたナカニズムによつて自然を支配しながらも、なお、人間自身の肉体と精神をもつて、自然と戦い、あるいはそれに同化しようとする素朴なロマンティズムの持主です。私達は、この素朴な心の故郷を探しながら、大いにワングルを試み、心身の向上をはかるべきではありませんか。

# ワンゲル創業

永 沼 嗣 朗

ワンゲル創業を思いついたのは去年の十二月だった。大学生活二年目、講義だけでは、き足らなくなる時期だ。私事で恐縮だが、小生が山にとりつかれる契機となつたのは高校一年の時、新潟県黒姫山に登つてからと思う。この山へ登つて行く途中、苦しくて二度と山へは登らないうそと大いに後悔したものだ。ところが山から帰つてくるとそんな事は忘れてケロリ、その後自然への親しみが密となつたわけだ。こんなことから行動をより広く容易にするためのクラブを組織しようという事に成り、鳳嗣おろしが吹きおろす十二月、西原上七室、相棒、ダンスと女には関係ないという極文句の深原氏と構想を練る。部員は何人集るか？ 装備はどうしようか？ とところでワンゲルとは何んだらうかなどと砂上の理物的議論までとび出しその年は暮れていつた。冬休み中、ワンゲル創業に参考となる資料アサリをやつたが神田の本屋街にも文献なし、そこで他大学ワンゲルへ手紙を出す。回収率五十%で小生のラブレターより好成绩。

冬休みが終り深原氏も北大ワンゲル校内誌「どんこ」を釣つて帰つて来た。いよいよ活動開始。ワンゲル結成

準備会なるものを二月十日、ウイーンナスを閉く事をブスターにて広告。有雨ホーイ二十余名集まり、現安田顧問もこの中にいらした。山大ワンゲルの趣言を自分なりの考えで説明し、四月からの部活動を軌道に乗せるためのリーダー養成合宿を春休みに行う事を約し期末試験の悪春まで一時中止。

やがてカエルがあくびをし、へびが背のびをする春、我々十一名はリーダー養成合宿を行い山大ワンゲルは出発した。前日六日、経済図書館に集まり買出しを行う。聖徳太子十一人を身売りしてナベ、スコップと交換。山高くして等からず残念乍ら低くして木も、東鳳嗣山を目差してテク。水場にはロテント三張設置。夜半、パラパラシューと雨を前奏としてヒューと風が吹き出し、パラパラヒューギーと騒がしいこと、おかげで一晩中痛れなかつた。痛れといえは朝三時頃迄雨、風の向をうとうととしただけであつた。うとうと、ザーヘケランドシートの下を水が流れる音、うとうと、バタバタ、バタ、ヘテントのはたく音、うとうと、ゴロゴロベテントがまくれぬいように並べた石のころがる音、、、、といつた具合である。おまけにテントから水がもれて来てワナっている口の中に入る始末である。しかし二の時自分はいそがしうとうのテントにハツタと向けた。というのはこの大騒動の最中に確かに一人大いびきをかいて痛てい

いる奴がいる。大した奴だ。今まで自分が兩のもらない所へ体をあつちこつち動かしてアアア云つていたのははづかしくなつてしまつた。成程将未ワソゲルのりーダ一にるべきものはかくあらぬばならんと肝に命じられたのである。聖朝その本人をつきとめてやるうと皆に聞いてまわつたがどうもはつきりしない。皆人は自分では無いと断定してしまつた。その後この話を何度かするが依然としてその名前は定かならず未だに死にかかつている。朝五時近くラジオの予報を聞くがどうも要領を得ず今日も天気は悪い位の争しか解らない。何んとも頼りない連中である。そろそろ飯の仕度をせんといかんのだがこの兩の中では誰も進んでテントから出ようとするものはいない。ついでに自分も出ない事に決める。しかしとうはいつてもいつまでもぐずぐずしてはおられないとしぶしぶテントを出て木に油をぶっかけて飯と味噌汁をつくつたが今では飯依りには一応、一見話をもちの御連中が兩に濡れながら一生懸命食べておられたのは飯依りであつた。飯が終つてから衆議一決出整する事になつたが地蔵峠に行く途中雨にまかれて方向がわからず、あつちへ行つたりこつちへまたりで大騒ぎをした。四名まで皆人は黙々と兩の中を重いテント、リュックを背負つて二三人づつ点々と歩いて行つたが結局予定の秋吉行はうやむやのうち中止と相成つて三才である。

ところでワソゲルとは何んだらう。確かに他の運動部と比較すると毛色が違ふ。そして玄義に解釈出来る。硬派に走れば山岳部と見分けがつかず、軟派に振れば觀光ハイキング旅行団に陥つてしまふ。だがワソゲルはどちらでもないはずで、この広い裾野のどこかを活動出来る点として山大ワソゲルをより高い理想に我々の独自性をむつて近づけていくべきでしょう。創立後日が浅い事も活動を妨げる悪い慣習がなく自分達の手で後に残る良き伝統を築くことも出来るし解釈できます。又それだけ我々にとっては大きな責任があるわけですね。

今年度の活動をふりかえると部員の心意気という点で不十分でありますし、又部員間の信頼面という点でも、もう一歩という感があります。体育会の一クアラであるからには運動部として、団体活動としてのワソゲルを才一義に急頭に置くべきでしょう。レジャーの産物としてのワソゲルであつてはならないはずで、部員各自の自覚により早く山大ワソゲルがあらゆる面で充実することを創立者として念願致します。





# 紹介

## 発足した農学部ワンゲル

久 樂 由 雄

山口大学農学部WV。二の五前が生まれてもう半年。この間、どれだけの事をしてきたのだろう。今ここに費紙へ我々の活動紹介と共に我々も自分達の歩んだ道を振り返り反省してみよう。こちらにもワンゲルを愛する者は多かつた。しかし在山WVとは地域的に行動を一緒にするといふ事は無理だ。で我々はこちらで結成する事にした。か一番の心掛りは人数が集まるかどうかといふ事だつた。否にしろ学部全員で一八〇名といふ所である。しかし、結成準備会には十八名集り大いに喜んだが二年生がほとんどで上学生生の少い事がもの足りなかつた。とにかく結成し一步を踏んだ。

向類は山積だつた。何から手をつけてよいか判らないぐらいだつたが、部員一同の協力のもとに部費月五〇円入部費二〇〇円に決定し、食器、水バケツ、まな板、庖丁、スコツプ、なべ、なた、とまあ最低の必需品だけ揃えた。しかし大きな向類があつた。犯人装備である。最

低、キヤラハンシユーズとキスリングを買ふ事としたが一度では我々のサイフとあまりにも離れている。かあるスポーツ店が月賦にのりてくれ、ゆるやら解決した。こつちの状態で出発したのだが、まず初めは野営に判れる事を目標としワンゲルはもう少し先にする事とした。以下はそれ以後の我が部の歩みである。

六月上旬、華山、参加十一名、徳山の港にて野営、一泊二日、港向を船が飛び通り、丁度満月で港の台さか浮き上り神秘的。

七月上旬、下向渡流島に渡る。参加十二名、竹司、下岡の光とその向を行く数十トンの船の光と汽笛、まずは最高の夜景。しかしあまりにも暑く不眠者続出。

夏期は在山WVと合同にて能登一回、参加五名。色々と勉強になつた。

秋期ワンゲルとして十一月上旬深耶馬。参加九名。一泊二日。かなり本格的ワンゲルを旨とす。丁度雨であ

つて雨が雨ならるはの風景であつた。  
中四国合ワシ 参加一名。

その他の部活動として週末ワシゲルを行つてゐる。これは軌道に乗りそうだ。こちらでは部室というものがなく又部員数の関係から部紙発行が困難であるため連絡板を作り常にこれを回覧し、それに各自の意見を書き込ませようにして相互の連絡を計つてゐる。これは一応成功の形をおさめてゐる。とまあこんな状態である。

これから冬を迎える。我が部にとり、この冬は一つの山であろうと思われる。この冬の活動如何により春から

## 紹介

# 発展する工学部ワシゲル

工学部においては、三十六年十一月、部員九名をもつて発足しました。当初、市内の小学生の遠足コースである箱陣山や防府へサイクリングに行つた程度に終つた。耳が明けて、各人千円づつ出してラジユースやコップフェルを買ひ、三月の種子島、屋久島に備えた。学部内ではワシゲルは一体何をやるのかと注目の的であつた。早く

の活動が決定されるに違ひない。

この間、体力の増強、野営技術講習会へ某会社山岳部協力し、歌ごえ会、せんざい会等の計画である。はたしてどれだけの事が行えるであろう。しかし、部員の協力の強さで今後ますます発展して行くに違ひない。未筆反から今後とも今迄に増して御指導して下さいます事を部員一同お願いする次第です。

嘉 村 耕 治

の嘲笑、冷笑を浴びせられながら、我々は、黙々と準備を進めた。そして屋久島へと出発した。

四月になると、学友会の予算会議の時、クラスとして認められるべく頑張つた。大いにもめた末、予想外の賛成でクラブとして承認された。そして予算はやつと二千円もらふことができた。また新入部員が二十名集つた。

合計二十九名へ現在二十八名、いづれも活動をもつて再出発した。それから、悪いつくま、計画を立て活動に寝してはすでに半年以上経過した現在、よやく外部から認められるよになつてきた。

ワンターフオーゲル活動は、未知の大自然にあふれ自然と融和調和し自然を求めへ山岳部の如き排戦的対決的態度でなく己の足でさまよい歩き人向性を培うものであるとはいへ、大多数の春は單なる物見遊山的女看えをもっている。これは部に屈する春においてさえ言えることであつた。

工学部における今までの活動形態は、抱味はなく非統一約でチームワークに欠けていた。ワンケル部は衰きワンダラーの養成の場として、部生活を重視しワンテリングを通じて他人との友情を深め協調精神を作り上げるべきである。しかし、我々の学部においてはその性質上、統卒がとれにくく、部による拘束はある程度排除されてパート、ワンテリング活動が主体となつてくる。しかし自然に接する態度としては全く変ることなく規律ある団体生活を営んでゆく積りである。発足以未済一オを迎えて苦勞を重ねてようやく軌道に乗つてきたものの、まだまだ幼稚なところがあるが、工学部の特色を生かしてあまり定義にとらわれることなく、これからの活動を力強く、楽しんで益れる自主的な活動を行いたく大いに意欲を

燃している。

在山学部、履学部、工学部各ワンケルの連合を機に互いに意見・資料の交換を図り大きく進展してゆきたいものです。

以下今年度の活動記録を記す。(日数 参加人員)

三月、四月	種子島 歴久島(12 4)
五月	宇部 厚乗カム 秋吉台(泊) 大正洞 黒猪洞 中尾洞 於福 徒歩ワンテリング(2 10)
六月	九重山(4 10)
七月	大山 帝釈峽(4 11)
七月	白馬、美しヶ原(7 4)
八月	比海道(24 10)
	上高地 穂高 奥日光尾瀬(16 5)
	富士山 八ヶ岳 谷川岳 若狭瀧(10 1)
十月	四月(10 5)
	宇部 美林 萩 山口 坊府 宇部自転車(4 3)
十一月	雲仙、西海 博多(若杉山 三郎山 宝壽山)(3 3)
	由布岳、九重山(4 4)

# 不安旅行のすゝめ

安田浩規

未知のものに向うとき、我々は喜びや期待と共に、一種の「不安」を覚えるものである。

新しい学校、広場、初めての乗物。今まで見たこともない器械を扱うとき。一面話もない人に会う前。又、止むを得ぬ事情で借用することになつた通りかかりの民家のトイレの扉の前に立つたとき……等々に感ずる緊張感や活着かないとわく／＼した奇妙な気持は、この未知のものに對する「不安」の現れたといえるだろう。

我々が見知らぬ土地に旅に出かけたり、初めての山に登るとするときにも、未知のものに對する大きな塵れや期待と共に、この「不安」をいつも感じないわけにはいかない。

旅費や日数はどの位か、るだろうか、交通の便は？、適当な宿泊地があるだろうか等といった事柄と共に、我々の出かけて行く土地や山が、本當に我々の抱いている期待や夢に添えてくれるだろうかという事が心配になつ

て来る。多くの金や時を費して出かけていった土地や山々の、自然や民情の美しさが、果して我々の旅情にうつたえ、「はるばると来つるものかな」という感激に愛してくれるだろうかという「不安」である。

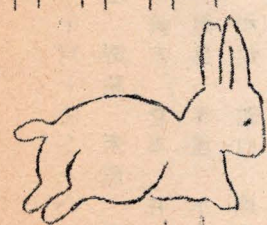
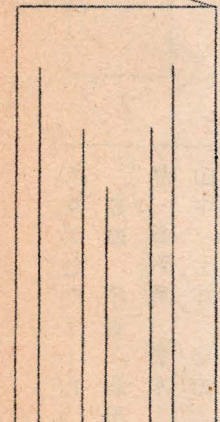
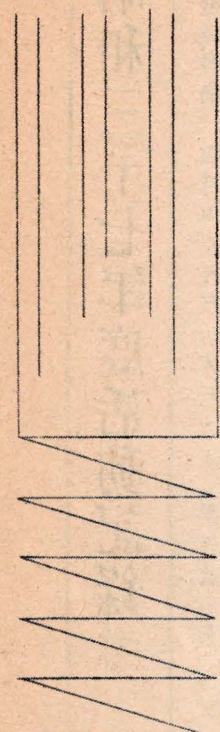
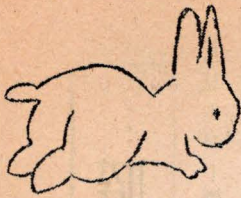
この「不安」のどりに、こゝになつた我々は、地図を広げ、種々の案内書を読みもどき、その土地や山に對するインフォメーションを求めぬ。又、かつてそこを訪れたことのある友人の話を聞いたり、出来るだけ多くの旅行記や紀行文を読み換つて、この「不安」を消すことに努力することになる。すると、真に都合のよいことに、大抵の旅行記や紀行文は、ロマンチックな言葉や連ねて、我々の感情をゆさぶつてくれるのである。曰く、白い雲、連なる山脈、青い湖、そよぐ樹々、かこことと名乗る山道又、友人は「いい所だよ、あの山は実に素晴らしい」と行って見るようにすゝめ、ついでに何とか亭のそばは、うまいから是非食べて来い、と親切に教えてくれるに違ひ

ない。そこで我々は「やっぱりあそこは素晴らしい」と  
自分自身を納得させ、はや短い彼の地へ……というこ  
とになる。そして「不安」は小さくしぼみ、代りに彼の  
地への旅に対する夢と期待は増々大きくふくらんで来る  
のである。

しかし、この巖上して出かけて行つた土地や山が、果  
して我々をして満足せしめ、「やっぱり来てよかつた」と  
いうことになるかどうか、はなはだ疑問である。おそ  
らく、大抵は「なんだ、こんな処か」と期待外れの幻滅  
に終つてしまわぬまいだろうか。以前、「旅はそんなに楽  
しくない」といふ話をしたことがあるが、この様な案内  
書や旅行記の読み過ぎからくる知恵過剰ということもそ  
の原因の一つといえるだろう。案内書や旅行記を前以つ  
て読んておくのは、大体の予備知識を頭に入れておくとい  
う意味では決して無駄なことではない。しかし、こう  
いうものを、そのまま、信じこむなら、むしろ読まぬ方が  
ましである。例えば、旅行記は他人の主観で書かれてい  
る。あの山が素晴らしい、何々亭のそばがうまい、とい

つても、だから我々もあの山に魅せられ、そのそばがう  
まいとは限らないものである。その人が素晴らしいと思つ  
たのは、山頂で美人と一緒になつたからかも知れないし  
そばを食べたとき、腹ペコだつたのかも知れない。或は  
そのほかみさんのお世辞が気に入つたのかも知れない  
からである。

私は旅に出るとき、山に行くときには、地図と時刻表  
の他は出来るだけそうしたものを見ない様にしている。  
せめてわかでも未知のものに出合う喜びを味わいたい  
からである。出発前、いくら「不安がいっぱい」でもよ  
い。いや出発前の不安が芽ければ芽いほど、旅中未知な  
ものに出合う喜びの回数も多くなつてくるものである。  
案内書や旅行記に書かれてあることを実地に確かめて歩  
く、これほど馬鹿らしい旅の仕方があるだろうか。  
「麦リ鳥」に案内書はない。彼等は不安がいっぱいの  
まゝで大空に飛び立つて行くのである。



# 昭和二十七年年度活動記録

◎リーダー養成合宿 四月六〜九日

東西鳳願 比安田 加治 末谷 永

沼 石田 高重 末岡 塚原 久柴

その他二名

メモ・テントは木口米ロ 雨はザ

ザー、全員ビシヨヌレ。

◎歓迎ピクニック 四月十七日

東風願 比永沼 加治 石田 塚原

高木 松本 末岡 畑田 隠善 小

田、楠見 藤川 富田 その他大勢

メモ・とてもおもくろかった。

◎春季合宿 五月四〜六日

長門峡ヶ放 比塚原 末谷 加治

高木 小坂 出島 小山 大谷

メモ・初めてのワンデルングでと

も愉快でした。

◎東西鳳願縦走 五月十九〜二十日

比高重 永沼 高木 出島 松本

深川 畑田 加藤 大谷 岸村 楠

見 藤川 富田

メモ・よく歩きました。

◎大山合宿

比永沼 塚原 石田 末谷 加治 藤

井 高木 出島 小坂 畑田 深川

高野源

メモ・はじめの県外ワンデルングで

統一を欠けていた感有り。ブタ肉を腐

らせたのは非常に残念だった。

◎秋吉台ワンデルング 六月三〜一日

比松本 高木 出島 小田 深川 土

井 岸村 新内 藤川 宮城

メモ・道に迷って大変困った。

◎夏季合宿

能登半島 比永沼 野田 末谷 加治

石田 末岡 福井 小山 深川 小田

山中 高木 橋本 本友 長瀬 久柴

岸村 新内 藤川 宮城

メモ・長期合宿であったので部長各自

のメツキがはかれ持味が出て親密感が

一層深まった。有意義だった。

◎秋若せミナール 十月十〜十八日

安田 永沼 石田 塚原 末岡 出

島 高野源 高木 鈴木 松本 井上

山中 土井 畑田 隠善 末屋 小田

長尾 森本 深川 岸村 新内 楠見

藤川 富田 宮城

メモ・ワンゲル精神。これからの活動

方針等々多面に渡ったこの討議は意義深

いものであった。今後もしどしどし

いう果を持ちたいものである。

◎中四合ワン 十一月三〜二五日

藤山 塚原 出島 深川 久柴 山中

畑田 高木

メモ・有意義な三日間を過ごし、今後の

ワンゲル発展の為に良い勉強になりま

した。

◎秋若台調査 十一月二〜二五日

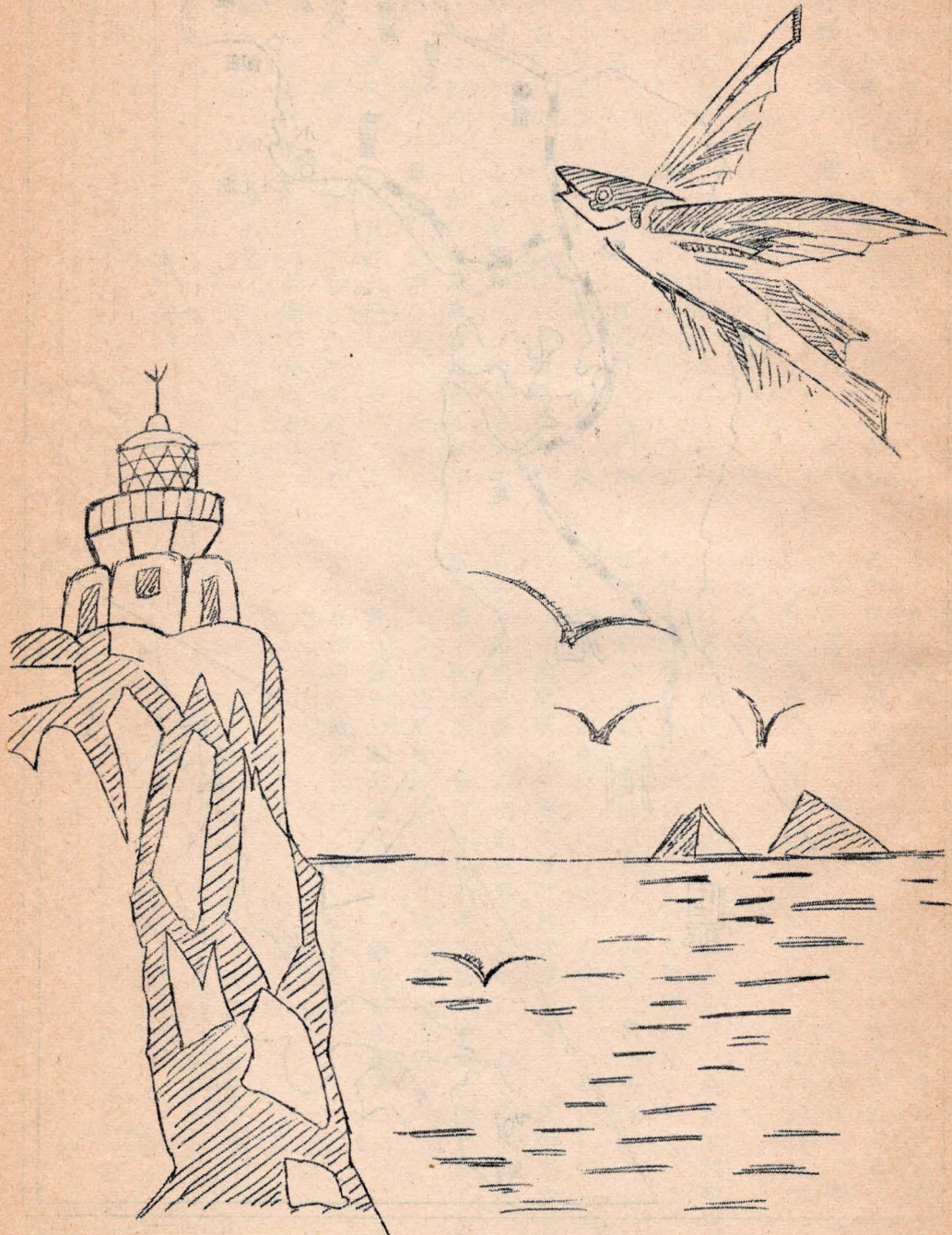
永沼 高重 松本 鈴木 片山 富田

メモ・更に綿密な調査を必要とする二

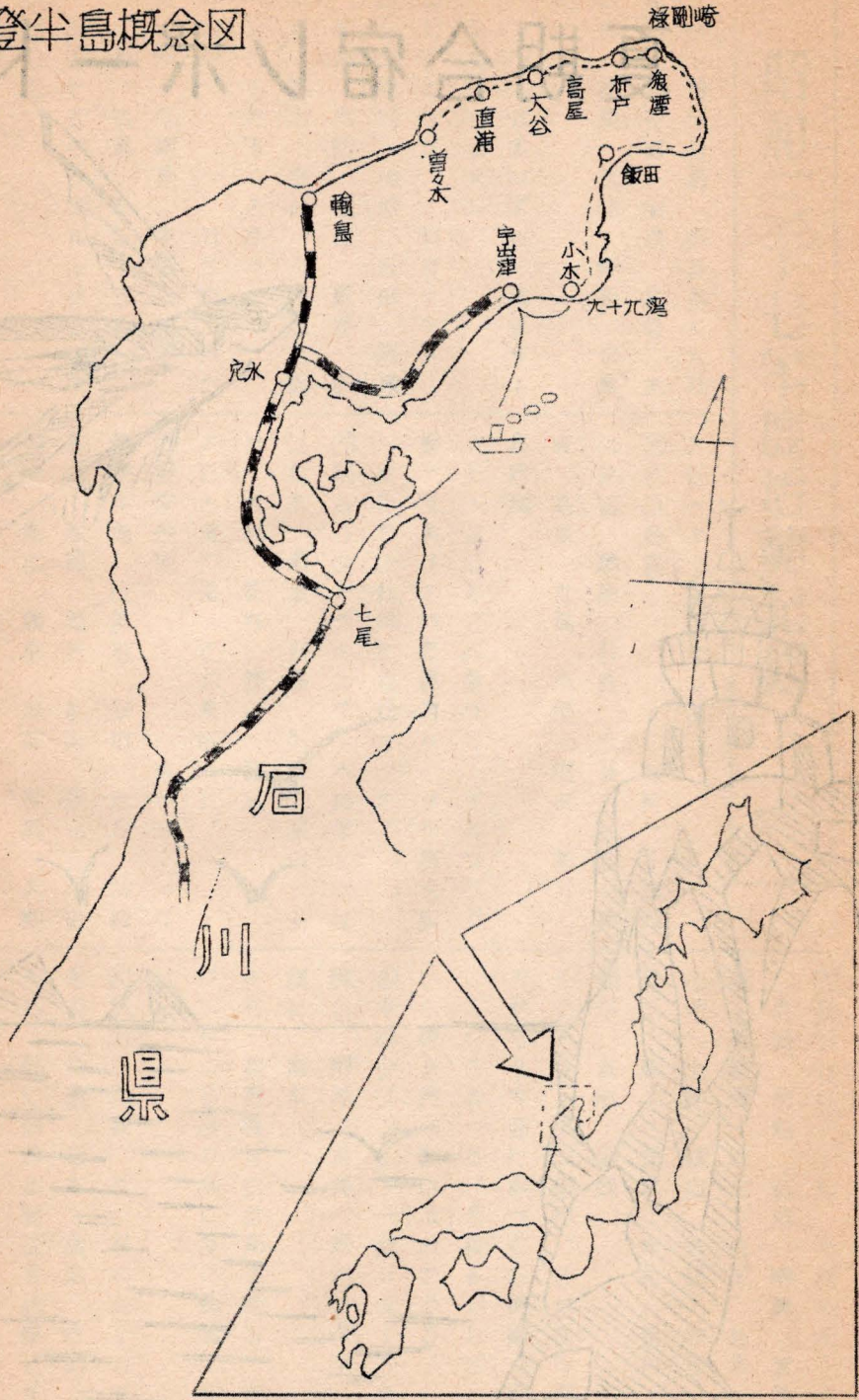
とを痛感した。

昭和37年度

# 夏期合宿レポート



# 能登半島概念図





# メンバー・コースタイム

昭和三十七年度

総 合

CL 永沼 装備 末国 会計 末谷 食手 高木

A パーティ

永沼 加治 深川 加藤 小山 新内 福井

B パーティ

SL 末国 末谷 山中 宮城 岸村 久兼 永瀬

C パーティ

SL 石田 安田 高木 小田 藤川 本広 橋本

第一日 八月二十五日 晴のち曇

山口発 (11・25) …… 列車 …… 石見益田発 (14・08)

第二日 八月二十六日 雨

福知山発 (5・24) …… 輪島着 (16・43)

第三日 八月二十七日 曇のち晴

輪島発 (11・40) …… 曾々木着 (13・15)

第四日 八月二十八日 晴

曾々木発 (7・55) …… 大谷着 (11・00)

高屋着 (14・55) …… 木ノ浦着 (15・50)

第五日 八月二十九日 雨のち曇

木ノ浦発 (11・00) …… 猿達着 (12・55)

二見着 (15・55)

第六日 八月三十日 快晴

二見発 (9・30) …… 飯田着 (11・10)

松波着 (14・35) …… 日和山着 (17・25)

第七日 八月三十一日 晴

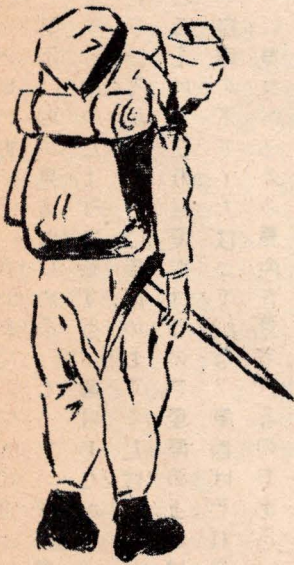
固定キャンパス …… キャンスファイヤー

第八日

日和山発 (6・40) …… 小木町発 (7・05)

七尾着 (10・00) …… 金沢着 (12・20)

解散 (13・30)



# 台風とともに北上

八月二十五・二十六日

午前十一時過ぎ山口駅発、殊暑厳しき中である。大きな荷物を持った日本人が乗ったため、ディーゼルはさぞかしびつくりしたであろう。二十七日時固、車中の人とするのであるが、さほど苦痛とは思われない。乗物に乗るのが大好きだからである。石見益田駅前食堂で冷レウドンを食べた。良く食べたものだといいたい。うまくなかった。ここで早くもヌドウのオヤツとは恐れいつた。

米子あたりまでは、一、二度見て知っているが、それより向うは見たことがないのだが、残念な事に米子あたりではすでに日没、見えない所を見れないとは、出雲平野に典型的な散村風景を見る事ができた。

午前三時頃福知山に着く。晩夏であるにしろ、夏には透れないのだが、さすがに福知山盆地だ。冷える。ホームでゴ口寝といったのはいいが寒い。眠れるはずがないが横になつたからには眠らにや損とばかりに眠つたことにする。

敦賀行きに乗る。東に向つて進んでいるのだから、自然の法則として日の出が早くなるのだが実際に身を以つて感ずる事ができる。いずれの時にか所にかあらん。夜

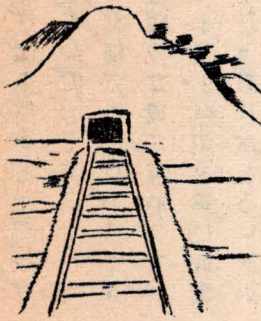
かしらじらと明け始める。雨が降る。さらに明ける。さらに雨である。海が見えはじめる。どうも、既に富山あたりに来てしまつたように感ずる。昔はあちかもぐつたりと寝れているかのように座席の上でくたばつてゐる。小田はと云えば、これは変形するので座席の上とは行かないので座席の下でくたばつてゐる。筆着はそれを全々面白そうに見ながら外の景色を見てゐるのである。

そろそろ乗客が増えはじめる。方言もだんだん例ける。敦賀、今庄岡、日本のトンネルをくぐつた。林して北陸トンネル。初めはそれと気がつかなかつたが、通り抜けてそれとわかつた。汽車へ特に鈍行の長飯は想像以上に金がかかる。あれよあれよとふところ工合が悪くなる。とはいへ金沢駅で食つた茶飯は、今もつておもしろいと断言できる。皆はと云えば、車中においては談笑とトランスに興じてゐる。筆着も時としてトランスに興かるのである。ヒ尾線特急「九十九号」の中で、キャツス永沼さんに学校替へ宿の交渉に行けと云われ、あわてて眠る事にする。輪島まで眠つたようだが気もしないではない。輪島に着くや否や、枚々宿さがし班とキャンス地さがしのクルーズは直ちに出発。雨は小降り。時々突風が見舞う。傘が変形する。ある小学校に到着。期待に胸を踊らせ(？)てお願いしたが、簡単にことわられた。市教育委員会に申合せているという。さもあると後で

思つた。我々と同じようにワンデルングする者も多  
いから一々とめていたのでは学校の方が困るのである。  
ことわられて当然という所であつて、団体ワンデルン  
グの場合、特にそういう事を念頭に置いておく必要がある。  
ふげし小学校の紹介で中畑某というお寺に向う。二十  
一人と例へてお寺も相当ちゆうちよされたが、結局、宿  
らせていただく。本望で。蕙気揚々とは行かぬまでも責  
任を果したという気持で駅に戻る。

凡呂に入れたという事は意外と云えば意外の事であり  
特筆すべき事である。

一夜のお寺の生活、制限されたものであんまり楽しく  
なかつたが、畳の上で寝たことがほんのなぐさめである。  
輪島市にも夏日本特有な法暗さがある。着いた日、誰  
にでも感じられた事であると思ふ。雨も冷いし、夕暮  
であつたし、そう思うには十分過ぎるほど條件はそろつ  
ていたのではあるが……。



(深川勝之)

## 朝市

八月二十七日

八月二十七日、その日は前日とうつて變つての良い天  
氣であつた。私庭、山大ワンゲル部は台尻と共に能登に  
あらわれ、台尻から能登にとり残された台尻の子供の如  
くであつた。以后、合宿において台尻の子の様に元氣の  
良い、つらい、珍妙甚日々が展開されたのであつた。行  
程を通じて、ワンゲル部の行く道々、夜書を及ぼさず、  
こちらも支障なく、カモ養えずに行けたことは、発生后  
固もない若い台尻の子供達にとつて大収穫であつた。し  
かし、私、山中個人としては、前日の輪島到着に際し、  
歓迎の人々はなく、しとしとと降る雨の出迎えとはちよ  
つぱり淋しく感じた。でも翌二十七日は、全く良い天気  
スケジュールも案に組んであつた。尻の青いワンゲル部  
員として尋いに満足すべき日であつた。思い出すのは、  
朝市での楽しかつた買物、凡体のよくない連中が買物す  
る姿は奇妙であつた。それに右らず能登のおばさん達の  
体の作りの良いこと、目を見はらせるものがあつた。も  
し私が全力疾走して来、彼女達と衝突したとすれば、そ  
の反作用として、能登一周は出来なかつたと思つた  
程であつた。へなにを隠そう、既に私はザツクの重さに

けんはりし、如何に楽にワンデルグ出来るかと、ワンゲル精神に反する様なことさえ考えていたのである。その様な女性運との取引、我部のお兄様方も少々お手ごずりの御様子、ニタリ、ニタリと傍観の立場にまわつていた私も、あの突然の「アリガトウ、エー」の大声には驚かされた。憎きよ、買物をしてまで「ありがとう」という感謝の言葉を強要されるとは……。実は「アリカトウヨレ」という彼女の感謝の言葉であつたのだ。又、海岸線の美しさ、大きな白波が大岩に砕け散り、侵蝕する姿は、能登の男性美を物語つていた。きつとこの美しさには魅せられ、女性が多く能登を訪れる原因になつてゐるのではなからうかと……。食事も楽しかつたなあ。各パーティのごとの食事は、食べたいという欲望に加えて、競争意識が一結になり、全てスピーデイに喰んでいた。食つた、食つた、たらふく。一日の楽しさは食べることにあるように、このように楽しみも大いにあつたが、やつぱり苦しかつた。ザツクが肩にくい込み、手がしびれ、足にマメが出来た。そのことも今は懐しい。私達は若者であつた。その疲労も一晩の休息でいえた。こうして二十七日は暮れた。この合宿において、若い部である山大王ンゲル、その中で又若い部員である私、ただ、がむしやらに歩いた。なにもわからずに、そのことは大いに反省すべきものがある。知証の乏しさ、自主性のなさを、

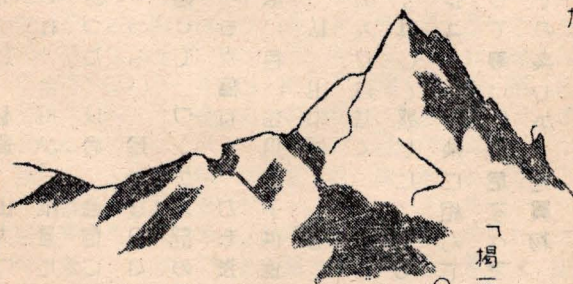
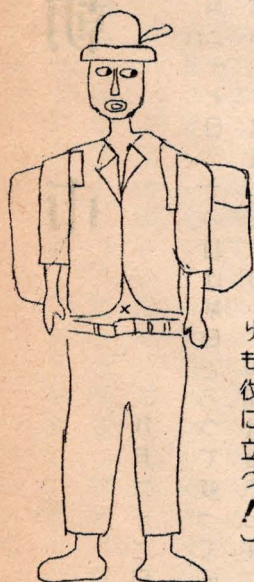
しかし、無から出発した私に忍耐という芽が芽ばえたことは嬉しいことであつた。これを契機によりワンゲルを理解する方向に向うのである。なによりもこの合宿が、山大王ンゲルの発展の基礎になるのであることは大収穫であつた。

(山 中 昭 夫)

「掲示板」

○ゆずりませ

- 一、登山靴(革製) 十一文 片方。新品同様 五百円
- 二、身分証明書 新品同様 但し質屋で三回使用
- 三、サンクラス 使用一回 片目破壊すれども新品
- 四、日本の市内パチンコ屋の終了台予想表 素人中級向。一部五〇円(概関誌より)も役に立つ!



# 木の浦まで

八月二十八日

我A班出発、八時(おそいぞ)。今日から本格的なワ  
ンデルンクが始まるかと思うと気がひきしまる。海岸沿  
いは道路工事のため、仁江までの道を山越えすることに  
した。やはり、上りになると調子が狂う。「能登はやさ  
しや、土までも」の九一号のおっさんが上の方で、道を  
間違えているぞ!と知らせてくれる。峠で新内嬢バテる  
無理もない。歩きはじめはくるしいものだ。

仁江海岸で小休止、海岸の奇岩を見る。宮崎の洗濯岩  
の部類なり。海水はすきとおり、ほんとに美しい。十分  
后出発。A班お得意の快調なペースでとばす。しばらく  
して、C班がアイスキャンデーをさもうまそうになめま  
わしている横を通過。お先に、バイバイ

大谷までの道はたんたんとしたバス道路。しかし、一  
度もバスに追い抜かれなかつたのは不思議である。昔、  
大谷は外浦の物資の集散地として栄えたが、今は、市に  
昇格したが飯田に役所をもつていかれ、さびれてしまつ  
ている。大谷小学校の先生の好意で、校舎の廊下を使わ  
せてもらう。これから先のコースについて意見も聞く。  
午後は予定を変更して高屋から木ノ浦まで足をのばすこ

とにした。

小さな漁村、高屋を過ぎるとバス道路も終りとなり、  
人がやっと通れるほどの波打際の岩の上の道となる。千  
本橋でくたばつていると、土地のじいさんがやつてきた。  
「木の浦まであとどれくらいですか」「さあねえ、十分  
くらいでしょ」それを聞いて元気よく出発したが、十  
分歩いて、まだ山の中。「あのじいさん、元気がよか  
ったんだな」と元気なくぐちがでる。二十分して、水に  
ぬれ黒ずんだ蓑を中に、白い波、白い砂浜を見下した別  
天地、木ノ浦だ。

日没まで相当時間があるので、土地の少年と親善ソフ  
トボール大会をやる。そのうち、C班も到着。砂浜の上  
に一列に設営。バッテリーやマーガリンのにおいが鼻をつく  
焼めしをたいたらげ、今日の無事と明日の安全を祈る。

テントから出て波打際近くにグラウンド・シートをひろ  
げシラフにもぐり込む。空を見上げると都会の星より大  
さい星が輝いている。

ふと、冷いので目をさますと、輝いていた星も消失せ  
真黒な空。パラパラときたのであわててテントにもぐり  
込む。テント内はむし暑く、懐中電灯の光をめぐけて五  
匹の親戚すじのような小さい虫がピョン／＼はねまわ  
り口の中に飛びこんだ元気のよいやつもいた。

遠くて高かつた

## 吉が浦鉦泉

八月二十九日



一日と云うものは、決して朝眼がさめてから夜寝るまでの間を云うのではない。ワングルの誰かがムニヤムニヤと喋言を云っている真夜中の零時零分零秒から始つてワングルの誰かがグーグーいびきをかいている真夜中の二十三時五十九分五十九秒……あ、面倒くさい。要するに、無限に二十四時間に向づく特時間を有するものである。と私は考える。

どこか古本屋の棚から引っぱり出した様なこんな長つたらしい、おまけに何の事やらさつぱりわからぬ前置を並べ立てて、本当に申しわけない・本筋に入ろう。私達は二十八日の朝最初のベースキャンフ地である。

又木を後にし、テクリにテクリて木の浦までやってきたA班のその夜の食争の素晴らしかつた事へ？天下一品の味と匂である。如何な深川さんでも手も口も出なかつたんだから想像できるでしょう。いや、実際あんなチヤハソ食べた事ない。満腹感を満喫しきつたA班の面々は、徒然に砂浜に腰を下して星を眺め歌を歌つた。半分以上ヤケウソだつたかも知れない。星空がきれいだった。ここまでが二十八日。人の縄張りを荒すつもりはさらさないが、話の続きぐあいだ誠に申しわけない。

ところが、ところがである。争もあるうちに夜中に水がもつてきた。いや下からではない。上からもつてきたのである。あんなきれいな星空だったのに。なるほど、男心と夏の空である。それからが大変。一つ断つておくが時計は確実に零時零分零秒をまわつていた。私の縄張りである。

A班というのはテクリるのはもちろん、食事にしる、設営にしる他の二班より抜きん出していた。ちなみに各班のニツクネームを紹介しよう。

A班―テクリ超特急 B班―普通急行 C班―鈍行

この争がかえつて上を向いてつばを吐く様な結果となつた。チヤハソの件については前に述べた通りである。

さて、雨がシャンジャン、凡がビュービュー吹いてくるとさあ大変。テントの支柱がガクガク揺れる。雨は入

つて来る。テントの住人は必死で支柱を支えている。飛べば、もろともである。しかし両も凡もやんではくれない。その内隣のテントも目をさました。おてんと様かうらめしい。と、今までわいわい云つていた。班のテントが急に静かになつた。不思議でしようがない。が、起きて出ることもできない。

夜が明けてこそこそ這い出して見ると、隣のテントは二つとも抜けのからである。さては蒸発したなとまわりをよくみると、五十、七十米位離れた所にある小屋の内、六人仲良く杓を並べてジャガイモと一緒に集団心中としゃべっていた。

それから食事の準備。ところが準備しようにも何も無い。昨晚のチャーハンに全部使つてしまつた。残るはラーメンのみである。これではあんまりだ。腹が減つてはイクサは出来ぬ。他の班は美味しそうに食事をしている。向くそ敗けてゐるものかと、船から釣竿を引っぱり出して、釣つた獲物は海草のみ。これでは向に合ひぬと、今度は布バケツをひつさげてニイナを取りに。四人がヤケクソになつてニイナを取つた。収穫大である。実際能登に来てニイナを食べるなんて考えても見はかつた。しかし美味しかつたな!

十一時三十分、思い出君い木ノ浦発。工事中のドロンの坂道を通り抜けて折戸で朝食のやり直し。リングゴ、

牛乳、アイスクリームをばくつく。十二時に折戸を出発。素晴らしいピツチである。お腹に詰めると俄然調子が良くなるのはA班の特徴。

一時に狼煙着。昼食、買出しの後灯台見学。とても乗敵な灯台だつた。林して Rokuyosaki - Beacon 真白であまりにも近代的なので、能登の最涯までやつて来たなんて感傷は一つも起らなかつた。へ感傷なんて持ち合わせてないんだらうですつて、まあ失礼な。其の日は狼煙から十分かそこらの二見にテントを張り夕食。カレーライスがとても美味しかつた。

深川さんが泳いでイラに刺された。体がベニシリンでギラ、光っている。風呂に入つた方が良いといふので皆で行く事にしたまではよかつたが、行けども、それらしき所はない。「家があるぞ」「ここに遠くない」差と云つて、寐ている所をたたき起したら家まちがい。とんだ迷惑だつたに遠くない。

やつと吉ヶ浦鉾泉についた。ランソの宿である。すぐ側は海。日本海の荒波である。廊下に腰掛けて、波の音を聞きながら足をムラク、させていると、ランソのほの暗い光目指して蛾が唄んで来た。哀れをさそう。真白な羽のせいかも知れない。大魚ぎで引き唄す。

今夜一夜の仮住いの中で、波の音を子守歌としながら今夜はもうシャワーのサービスはけつこうだと考えた。

# 九十九湾

八月三十日

六時起床。まだ舟虫が体の圍りをはい回っているよう  
な気がする。こんな虫さえいなければこのきれいな海洋  
でキャンヌでできる事を感謝したるうに。今日はよいよ  
最後の固定キャンヌ地へ。朝食が済んでリーターから、  
午前中バスだと例いたとたん、うれしさに飛び上った。  
午後少し歩くと、それでもいい。今日も又、重い足  
をひきづりひきづり一日歩くのかとうんざりしていた所  
だった。

飯煙のバスのりばまで歩いて、十時、飯田行のバスに  
乗る。現金なものでとたんに外の景色がきれいに見え出  
した。十一時十分飯田着。町の中をおんぼる部隊のパレ  
ード。この珍しい一行に通りかかりのだれもなかり返る  
一路春日神社へ。こうして歩いて、すでに我がこのす  
ばらしい装いに無感覚になつてしまつてゐる。又しぶり  
にゆつくり昼食をとり、たつぷり手足をのばす。お寺の  
方は親切だった。旅ではやはり人の親切が一番うれしい。  
一時三十分飯田発。松波へ。ここから私達の籠登合宿最  
終、九十九湾日和山キャンヌ地まで歩くのだ。買出しが  
終つて出発。

いつもの通りまずA班、少しおくれてB班、最後にC  
班だ。最初は元気いっぱい、ホーの休憩、所でA班を追  
越す。今日だけでもA班より先に行きたいと、しかしA  
班はまた私達より先に出了た。やはり急行だ。日和山への  
近道をとる。だんだん山の中へ入る。たいへんなだらか  
な坂だが長いこと、息が苦しくなる。今日が最後だ。頑  
張れと我身をばげまし、一歩また一歩、途中荷車をひく  
土地の人に会う。「ごころうさん。」頑張りなさいと  
と声をかけてくれる。これまた歩く者にとつてうれしい  
争の一つ。ほんとに元気が出る。先に行つたA班の調子  
をとる笛の音が時々耳に入る。つい先のはずだが山の道  
では全く姿が見えない。道は二つにわかれる。「オーイ  
」皆で声をそろえる。「こつちだ。」そう遠くもない所  
でA班が答える。C班は相変らず鈍行のようだ。

また登り。呼吸調節、山口を出て五日向、そろそろ液  
れが出てくる。どうしても呼吸が乱れる。ここを下りた  
ら休むとリーターが云つた。大きく息をはいて又歩く。  
A班が線路のそばで休んでいる。少し先のお店で休憩し  
ようとA班の前を通過。「頑張り。」お先に」と云いあ  
いながらも実はうらやましくて横目でにらむ。お店につ  
いた。苦しい。ジュースを飲む。お茶をもらう。それで  
も駄目。ついにとんとん飛び上る。完全にクロツキ。  
もう動きたくない。その間にA班が羨ましそうに通過



どうしてもA班にはかなわない。しやくだからジュー  
スを見せびらかす。十分休憩のはずがあと一分あと一分  
とついに十五分も休んでしまった。意を決してリユツク  
を取り上げた。この山を越したら終りだと云う。「頑張  
れ」よくもまあすらすら出る事だ。その口がにくらしい  
前の山をにらんで立上る。上までどの位の距離だろう。  
キヤラパンで土をたたきつけるようにしてすすむ。前を  
見るのもいやだから足下をにらんでいたが、いけどもい  
けども山道に入るようすがない。おかしいと思つて顔を  
あげたとたんトンネルが見えた。山を登るのではなかつ  
た。リーダーやみんなの顔も思わずほころんだ。みんな  
この山を越えるものだとばかり思つていたので。トンネ  
ルは工事中だった。工夫さん達が働いているうす暗い中  
をくつ音をひびかせながら歩いた。どこからか水がしみ  
出てくると見えて道が悪かつた。が私にはありがたい道  
だった。工夫さん達に大きな声でありがとうと云いたい  
程嬉しかつた。トンネルを出たら別世界だった。海が、  
静かな入江が、青く深く澄んでいた。松が美しかつた。  
またトンネル、次の世界は入江のまわりに人家があり、  
護岸でまわされた入江の中には舟も浮かんでいた。入江  
の奥の方の道の側には舟がこうらほしをしていた。絵の  
ような景色、波一つない水面の人家が、山が、木が、印  
象的だった。もう一つトンネルがある。ここはもう九十

九湾だった。このいくつもある静かな入江がそれだった。  
今度のトンネルを出た所は小水町、道は家々の間を通  
つていた。四辻を左へまた左へ曲つて、さつき通つたト  
ンネルの向うとこちらの入江の向に舌のように併ひ出し  
ている川高い山の突端に私達の最後のキャンパス地がある  
のだ。日和山キャンパス村。とうとうここまで来た。約二  
時間、今や頂上への石段を一步一步登つていた。

たそがれ時の静かな入江が美しかつた。  
苦しかつただけいつそろ至びは大きかつた。

この地で最後のキャンパスが出来ることなうれしかつた。  
しばらくしてC班到着。みんな明日の固定キャンパスの計  
画をはなしつつ、楽しく夕食のしたくに取りかかつた。

(宮城 ヒロ子)

## 解放された一日

八月三十一日

朝五時半起床。晴、例によつて朝食の準備を始める。  
特にC班においては本広君が都合により今日帰路につく  
ので早めに食事をやる。いつもは大抵一番遅い。それで  
も本太郎君は食べ始める迄クウスカ〜で起きてテン  
トから出てくるや否やすぐばくつき出した。本広君を送

つて後早速取りかかったのが、たまっていた洗濯物である。この時は暑さと汗で相当に汚れていたであろう。洗濯をしないやつらは年がいもなく魚釣りに興じている。竿らしいの一本しかなく、殆んどはそこらに落ちている竹に釣り糸をたらしめている。それでも釣れるから不思議である。

ホート三台と伝馬船を借りて九十九湾を遊覧しながら舟の上から釣り糸をたれているやつもいた。そして、釣つたやつは魚を喰う事は出さず、釣らなかつたやつらがパリついていた。舟代はとられた。しかし払わずにすんだやつもいた。この日の昼食は自由課題で一人に百円也の大金が渡された。それで自由になつたせいにか、昼からは誰も彼もどこへ行つたやら静かなキャンパス地であつた。夕食はこの合宿初めての魚であつた。海岸線ばかりテクつていながら魚を食べんとは何事だと云いたいだろうが、食事計画がずさんだつたのである。食事と云えば予定通りやつたのよりも変更の方が多かつた。エサ係は一体何をしていたのか。しかし中にするいやつがいて、サバを喰うと蕁麻疹が出来る云つて缶詰をねだつて買つてもらつた奴もいた。そんな奴に限つて魚も缶詰も食いやかつた。もちろん蕁麻疹なんか出まつたはなかつた。さてその次はこの合宿最高の豪勢さでキャンパスファイヤーをやつた事である。ワングルが出来てからファイヤ

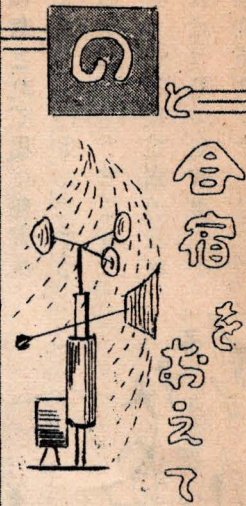
ーらしいのはこれが始めてであつた。ここに燃やす木があつたことは幸いである。もちろんただである。

陽も西に沈み、日和山のキャンパス地は暗さを増しつつ、空には星が一つ二つまたたき始め、海に漂う船の明りも桌々と散らばり、人家の灯も明るさを増してきた頃、一日の終りを歌つて、あたりがシーンとなつた時、パリと卓火されるや、一面を真昼の太陽の如く赤く照らした。やがて木が燃えはじめ皆腰を下す。それから忙がしいのがエサ係がある。最初にリンゴを配り、それからおつまみとビールへ一人一本ですぞ、豪勢だろう、いかなかつた奴には解らんだろうが、それ迄節約の爲にうまいものをエサ係は食わさなかつた。だからと云つて動けなくなる奴もいなければ、病気になるやつもいなかつた事はエサ係に感謝するべし。こころやつてせつせと働いている同にも、皆も食うだけやなく色々とりクレ係が知恵をしぼつたゲームをやつていた。

しかしこれと云つて特筆に値するのは、僱入りの夕桑君の落語であつた。そのうちに西瓜が出た。そうして夜もふけて十一時頃にキャンパスファイヤーは終つた。一週間の能登合宿の最後の夜を、ここ九十九湾の波静かな日和山のキャンパス地のテントで寐る事になつた。

空に月が高く昇り星が一面に輝いていた。

# 感想宿合登能



藤川禎子

友達から「能登へ行っても自殺しないでね。」と変な見送りをされて、八月二十六日目指す能登の玄回輪島についた。さてこれから私の最もくやしいパテ版日記が始まるのである。なんといつてもくやしいのはパテてしまつて昏に追いつけず迷惑をかけることである。自分が情ないやら口惜しいやら、ああ、この感情はパテた人のみぞ知る。私は亦一日目の何山だかは知らないけれど、そこに登らされた時、早速一番にパテてしまつて自分に愛想をつかしてしまつた。ふもとの方では、黙々と歩きなから「どうぞ神様パテませんように」と心中で、どこの神様だかは知らないけれど、勝手に祈りながら「今日は朝飯も十分だし、睡眠も十分だ。だからパテるはずはない。」と空元気をつけながら登る。だがまだこんな事を考えられるときはいい方で、登るにつれて「頂上はまだかしら。」「としきりに頂上の所在が気

になりだす。こうなつてもまだ救われる余地は残つてゐる。それは頂上が近いことだ。遠いとわふると先に心がへナ／＼となる。足が動かなくなる。「自分に取けた」と唇をかみ自己に對しての絶望が心の中に大きく広がる。私は足には十分自信はあつたが、能登の山には全く降参で足が前に出ないのには我ながら驚いてしまつた。動かそうとしてもどうしても前に出ないのである。フウフウ一人が云つてゐる。さてそこから荷物を押してもらいなから、全く心の中は冬風が吹いていて心細い限りである。「C班の人は可哀相だな。私がいるばかりにA、B班に遅れてしまつて、引き返そうかな。だが色々な事情を考えると無理だし……。どうしようかな。えい。仕方がない。C班の人には私が入つたのは運命と諦めてもらつて、能登だけでもどうにかまわつて、山口に帰ると早速退部届を出そう。」と必死でそれだけ考えたものの、いざワングルをやめようと思つと、次々お懐しいあまりたいした顔でもない顔々が浮んできて、まるで永久に別れてしまふ様な気さえして涙物語りとなりそうで、うら悲しい気分になつていたら頂上についた。頂上に登りさえすればこちらのもので、あとは何でもござれである。

ところがである。ところが、その私が昼におにぎりやたくさん食べたなら、俄然調子づいて、ああ、その日から調子のいいこと。別におにぎりだけのせいでは

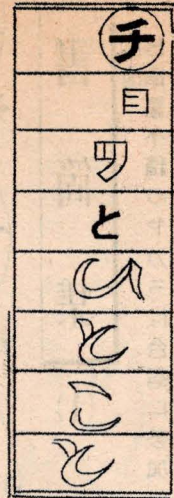
ありません。いつも大体二番目を振っていたのは私。いくら調子づいても登りだけは弱く私にはいかんともなしたがたし、と思つていたら、あにはからんや「あの坂をこえてから休けいにしましよう」と云い出し始めたくらいだから、世に不思議なことが絶えないのも無理はない。友達が松本清張の『00の焦卓』を讀んで、熊登の海は暗く陰うつな所だろうと想像し、私に自殺等しない様忠告してくれた如く、私も何だか暗くわびしい所だろうと想像していたのだが、そこは意外に明るかつた。真夏の太陽をギラ／＼とつけていたせいかな？ 山陰を通る時ちらつと窓外にみたが、山陰より明るい気さえした。人構の暖いこと。私の舌足らずの書き方ではかえつて不十分でろくなことはないからやめておくけれど、常にほのほのと暖かかつた。波の荒いこと。岩の尋いこと。誰かさんの説明によるともと陸地だつた所が侵蝕されて固い部分か岩として残っているんだそうで、奇岩が面白い。ちなみに友達に送つてあげた岩の絵葉書を彼女が「あの絵葉書によると、怪物か何かそんなものが、ガリブリと口をあけた様



な岩ではありませんか。云々」と書いてある。真夏の炎天下を行進しながら、ふと見ると岩の景色は興味深々たるものがあつた。海のすぐそばを通りながら、前の人の足ばかりをみて、そばの景色等はあまり鑑賞する暇がなかつたのは残念であるが、  
 固定キヤノスの時、この日こそ一番思い出の深い日である。というのは生れて始めて舟に酔つたから。「乗物には絶対酔わないじなど」と豪語していたのも乗の向、舟をとめて各々釣糸をさげ、私だけがそれを見る破目になると、だがまだここでは大丈夫。一段低い所へ下りて魚を小さく切る作業をなしておえた時の最高のフワフワの氣勢。もう駄目です。海はいやにねばつくくどろんとして水が上下運動をしているし、皆は魚釣りに夢中になつているし、周囲はあくまでも静かだ。  
 今まで「酔わない」と豪語していた手前、すぐに「酔いましたから帰して下さい。」というのも麻だし、かといつて頭に血の気がないのは鏡をみるよりも明らかで自分の悪いのは隠しようもない。「前に乗つていた人がすぐに帰つてくれたのが、今にしてわかつた。」と思つた所で後の祭り。ついに酔つたことを白状して、忠告に従つて遠くの景色ばかりみて、うまくもない歌を大声で歌つた。それでも舟が流されていることや、波がどろんと動くのや、それやこれやいたらんことまではよくわかり、

生れて始めて乗物に酔う気持がよくわかった。

ついにこぎ手をのぞいた昔が舟酔いして上陸する運びとなつた。適当に酔いながら歌を歌いながら、人が電気がラゲがのぼつてきたとか何とかワア／＼いうのをみているのも結構楽しかった。結局收穫物はわずかしかなかつたけれど、本当にいい日でした。



★

### 加藤 征治

地図を拡げると、日本海の荒海に腕を伸ばし、まるで北の佐渡の方をさしているかのような姿の能登半島。都会の騒がしさ、煩わしさから遠く離れた、地図の上でしか知らない人のあまり行かない様なこの半島へ、自然の美しさ、力強さを求め、半島がロマンチックな旅情をそめるのもたぶんそんな気持からなのだろうが、大いに期待していた。

途中、山陰線周りのその汽車の中、突然誰かが「ワ、ワ、ワ、山陰の海は恋に破れた様な色しとる」と叫んだのに思わず「とどこ」と今までのんびりしていた連中が汽車の窓から、外に広がった大きな海へ体を乗り出す深夜二時過ぎ、福知山へ着く。長い汽車の旅の疲れから

か、殺人駅のホームにリュックをならべ、それを枕に打死の有様。全くユーモラスな姿だったとみ。こんなことが出来るのも、キヤラパンを履いた旅行の気安さか。また我々ワンゲル男共の天下泰平気分からか。

そんなことをいろいろ考えている中に、つい自分もうとうとし次の列車の汽笛に驚き、目をさます。こんな愉快な事をやりながらトンネルを通り険しい山向を縫って長い汽車の旅を続けて行つた。能登半島は輪島から出発し、北端の緑剛崎、金剛崎、外浦の男性的な荒海や、南の九十九湾の様な内浦の女性的な穏やかな海岸すばらしく、そんな美しくまた力強い景色は我々の疲れた心を慰め樂しませてくれた。

しかし我々の一週間の長い合宿もいろいろ反省してみると、観光とか、また運動部としての、合宿の意としての単なる訓練、強化の爲のものでなく、もつと、たとえば郷土史の研究とか、カメラルポ共、そんな活動もやってみれば面白かつたのではないでしょうか。天候の無條件共もあつたが、キャンパス設備地やまた一日の歩く行程并に對する地理調査、知能の不足などで、ワンゲルのベイスが少し乱れたのは残念だった。

まわりの美しい景色や流れ出る汗をも気にせずただ黙々と歩いている時、また疲労空腹感共でお互いに苦しい時、そんな時一番大切なのはやはりチームワークと云う

ことではないかと思つた。他のスポーツの意味するもの以上自己を否定し、自然に溶け込み、自然を通じてパーティーの中にお互に楽しみ、苦しみながら行動する。我々Aパーティー(リーダー永沼さん以下加治、福井、新内、深川、小山、加藤の七名)は食事や装備の桌で苦戦しながら、終始快調なペースでトツスを行き、楽しく歩くことが出来たのも合宿最後の行程の固定キャンプ地九十九湾へ至る坂道を疲れた足で登つていた時、誰ともなく叫んだ「フアイト！」の叫び声を思い出す時、これこそチームワークだと確信するのです。そしてこれが楽しかつた夏の能登合宿のすべてだと思つたのです。

# 書簡集

(1)

日頃  
日頃筆不精のヤカラは合宿に参加したついでにと、中学卒業して以来ゴスサタしている悪友に自分の存任を再認させるため、枚五円の葉書を出す。この様な沙汰ほど無責任で調子のよいものはない。出した方、受けとつた方、いずれも覚えがある

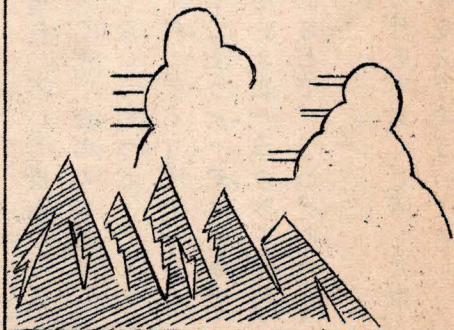
★初めて合宿に参加した純な娘から

オフクロへ

お母様、出発前にはいろいろと残儀を云つてすみませんでした。でもやはり参加してよかつたと思います。無作法な男子部員の中にまじつて大きな荷物をついでモクモクと歩く

# 詩 私の一日

ヨガ アケタ  
カオアラリタ  
メシクツタ  
タタ ソレダ ケノ  
コトダ ツタ  
オオバ カメ

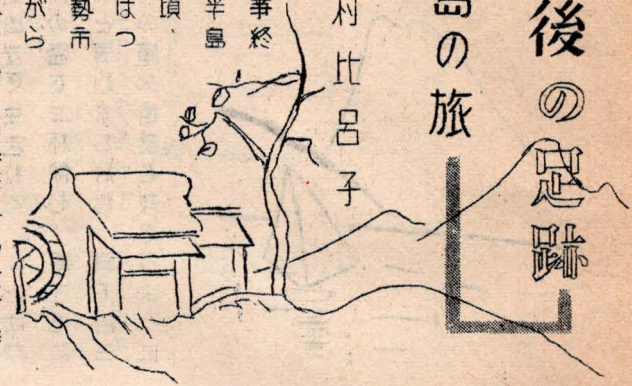


私のたのもしい姿をお見せしたいくらいです。家の近くの低い山々を見るのと違って、人里離れ、自然の中からみる木々や山々は美しく、私に新たな感激を与えます。ただし、悲しいことが二つあります。そのひとつは、日焼けでスゴイ顔になつてしまったこと、お母さまの顔を毎日見れないことです。

# 能登合宿後の定跡

## 紀伊半島の旅

岸村比呂子



九月一日、能登合宿を無事終えて、ホニの目的地、紀伊半島へと向う。富山を二十三時頃、出発。真夜中の日本横断とはついていない。二日、まず伊勢市へ・伊勢神宮へ参詣・場所がらキヤラパンスタイルは気がひける。両手を合わせて残り少い旅行中の安全を願う。人の波で薄さもなにもあつたものではない。次に、夫婦岩のある二見へ。おみくじをひくと大吉。旅先き、なかなかよし。PM二時頃、鳥羽に到着。まず鳥羽港巡り。遊覧船で湾を一周。神島や菅島などを見る。多くのタンポ（養殖筏）があり紀伊独特の風景である。次に、四十円奮発してパールアイランドへ。真珠について少しばかりの知恵を得て、桃色の真珠が一番値段が高いらしい。今夜の宿泊地、金胎寺に着い

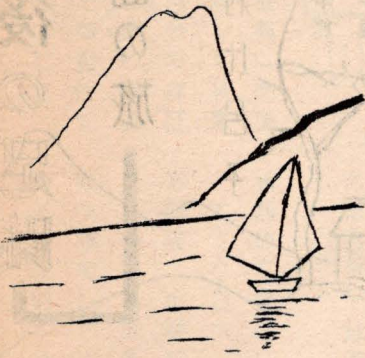
たのが、PM六時、一週向ふりの量である。そのせいか翌朝七時の出発が寂すとして一時間半遅れる。

九月三日、そんなわけであわただし朝をむかえる。朝食をそこで食べ、電車に乗り込む。前島半島の東端にある大王町へ。ここで大王崎灯台見学。灯台の下の断崖に砕ける怒涛はすばらしい景観であり、人間一人が通れるくらいの迷路のような石畳が印象的である。

次に、御座賢島とまわって、再び伊勢に帰ってきて、次に那智へ。車中からの風景はすばらしい。また、能野新宮向のめまぐるしいトンネルの連続、那智駅は海辺の駅で、松がホームのうちにとりいれられている感じのいい駅である。今晚と明晩は当地のコースホテルにて一泊。偶然にも山大の学生と出会う。世間は広いようで狭いものである。ここのおじさんの親切は忘れられぬ。九月四日、馬へと足を向ける。ガタガタバスに揺られてまさに腸がねじれるばかりである。宮井からムロペラ舟に乗る。瀬八丁の入口である洞天門でムロペラの回転をとめ、マリンガールの瀬についての説明。ムロペラ舟はエンジン止めたり動かしたり、小刻みに深洲の上をすべっていく。時々川底にあたって不気味な音をたてる。絶壁と深緑の水の色。さすがは瀬である。次に、旅行日程にはくんでいなかったが、熊野市にある鬼が城へ。奇岩と洞窟の連続。自然が長年かかつて生み出した人工で

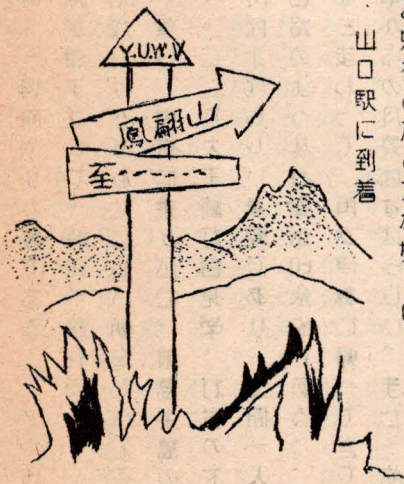
は思いも及ばない風景である。数十メートルの絶壁の面から眼下をのぞけば怒涛が岩角に砕け散り、また、岩の面に押しよせる波が轟きとともに吹き上げ、まことに壯観である。(台風の影響かもしれぬ)

九月五日には、那智山へ。どことなく神秘さをもつた那智原始林、右へ揺らり、左へ揺らりの曲りくねった道を、バスに揺られて、日本一の名瀑といわれている那智の滝へ。御滝水がある。「これを一杯飲むと十年、二杯飲むと二十年、三杯飲むと死ぬまで生きれる。」とはがイト嬢の説明。私は備え付けの盃で二杯飲む。滝を見た瞬間、あゝ、来てよかつたと思わずもれた。真下百三十メートル(説明書による)の滝が絶壁をなでるようにして落下しており、渾しぶきは霧のように飛び散っている。崇巖で優美な滝である。次に那智の南にそびえる妙法高原へとつづらおりの道を登って行く。山頂からの眺望が広く、勝浦や潮の岬にかけて見えると肉いたので登ったのであるが、あ



にくの雨模様のため眺望がきかなくなつたのが残念。高いので寒けがする。せっかく来たのでジュースを飲んで下る。那智ユースホステルを後にして潮の岬へと向う。天候も影響してか車中からの風景は南国の感じを思わせる。みかんの木も青い実をつけて列をなして見える。冬来ればよかつた。台風の進路にあたり凡が強いいため、家々には防風林がめぐらされている。潮の岬灯台の中は見学せずに広い芝生を直指して進む。ここは望楼の芝といい、芝生地周囲には放牧の牛がのんびり草を食う。冬来ればよかつた。まことにのどかな感じで、他の岬の風景とは違った印象である。いつまでも芝生のうえに寝そべって青空をみていたい。が、そろそろ潮の岬ともお別れの時がくる。民謡串本踊をみて串本駅をあとにして、一路帰途へ向う。家に帰れると思うと嬉しうたが嬉しい。

九月六日 早朝、山口駅に到着





# 一人旅

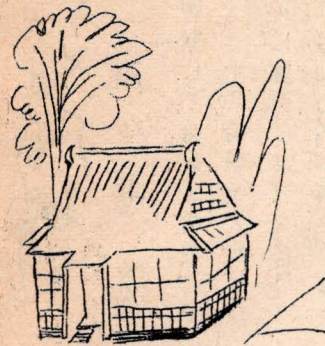
深川 勝之



九月一日、十三時三十分、金沢駅にて合宿を解散。金沢大学、兼六園を見て後北冥寮へ。十八時頃金大北冥寮着。泊り料百円のところを二十円に強引にまけらせる。ほそほそと携燦でお茶を沸かして飲んだのは良いが墨が焼けてしまつちやつた。二十二時頃約束を破つて布団を敷いて寝る。何日振りの寝具であるうか。翌二日・五時三十分起床。同五十五分寮出発。六時四十五分金沢駅到着。同五十一分末国氏出発。七時五十分我出発。いよいよ一人旅が始まる。九時二十分金津着。前の座席に座つている人が親切なおばさんであつたなら、跳び起きて、わざわざ窓から跳び出る事なんなせんですんだらうに。芦原行きに乗らねばならんのだがどこがそのホームかわからんかつたのでぶらぶらしていると親切な車掌が借んできて急いで芦原行きに自分を乗せたのである。十時十分飛騨丸。最初の計画では乗る心算はなかつたのだが来てしまつた。奇勝東舞坊と書いてはあるのだが。ちつともそんな気はしない。十一時、飯へすなわちクラツカシーを朝食を兼ねて昼食とする。日本海の荒海を足下に見

下しての飯もまた格別である。十三時過ぎ金津駅に舞い戻る。どうも旅をするのに最も必要なものは金のようだ。金のないのは全くさびしい限りだ。金にものをいわすかわりに、あつがましきでもつて旅する事にした。懐には千円足らずの金がある。金津駅にて日通のトラツクを拾う。越前大野市に行くという。これ幸いとばかりそこまで行つちやつた。ここにて沈黙する。まず小学校に當つてみる。ことわられる。次に公民館これまた同様。三度目にお宮に行つてみる。これまたしかり、如何とも為しがたし。気晴しにパチンコをしてみる。簡単に五十円程負けた。余程じやないが疲れているんだなと痛感する。大野市五万の都市なれど俺をとめてくれる有志は居らぬのか。一人情な奴ばかり。土方凡の人に出合う。話せば山口にも行つた事があると、我に同情したのか二十分程話して行つた。彼白く、大野の人間は全然ゆうづうがきかん。云々、結局、理解ある福井大ワングル部卒業という高校の先生にその大野高に泊らせて頂く。色々参考になる話を聞かされたが、ここで述べる余裕はない。その先生に云われた通り、その何となく農奴のトラツクをつかまえると、気象に乗せてくれた。美濃白鳥まである。九頭竜川の上流をぐんぐん登つて行く。すばらしい景観である。今朝は五時三十分起床。六時三十分大野発。高い、寒い畑坂峠を過ぎれば岐阜県である。九時三十

分美濃白鳥に着く。俺は幸運な奴だと思ひながら日通のトラツクに便乗する。十二時頃、木曾福島なる所で降りる。ここらへんから歩いたら良いだろうと云うので、おつさんの話によれば、ここらはタムの出来る以前は戸数二三十戸の家があつたのだが今では水の底という。木曾福島から歩いて二十分位、御母衣弟一タムがある。そこで昼食・クラツカー六、七枚、怪しい雲行きの後雨が降り始める。平瀬なる所に夕方頃着く。雨、冷い雨が降るために歩く気がないのでバス停に沈黙しようかとも思ひ、富山に出る貨物を拾う事も考えたが、結局それもだめと分り沈黙することにする。この辺り民家では泊めてくれないそうだが、明くる四日、昨晚の羊煮えの飯で作ったニギリ一つを食う。五時四十五分、白山登山口を出発八時四十分ジースを拾うまで歩き続ける。全く休む気がしないのである。ジースにはアベツクが乗っていてオツサンの方はためらつたが、女の人の好意で乗せてくれた。運よく城端なる所迄四時頃近くも乗れたので嬉しくて。中部電力の方だったが、假白く、どこの方ですか、找白く、山



口県です。白く、ああ、東北の方です。遠くから来らつしやつたんです。找白く、はあ、あの中国地方ですが、ああ、そうですか、中部の方ですか、はい、え、山口大学の学生ですが、ああ、そうですか、なことで大笑い。

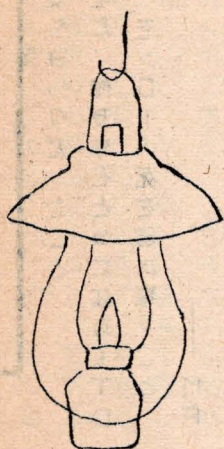
城端で高岡運送なる貨物をつかまえた。富山行きである。十五時過ぎ富山駅到着。街をふらついて駅に帰ってみると、加治、未谷、永沼、石田、高木の諸先輩に出くわす。人情として一緒に帰りたいくなるものである。高山で沈黙すべき所を洋急飛騨二号にて岐阜に出る。切符を買ったら姫路まで買えたので姫路まで乗ることにした。

大津、余程じゃないがつまらぬ街である。高木さんと共に大津をくさす争しきり。気晴しに大津駅前で高木さんの金でもつて水を食う。何故なら僕は一月も持っていない。京都駅にて下車。またしても找一人である。まあ京都の美事な調和に驚かされ、ついには再び駅にたどりついた時は面足にけいれんを起してしまつた。よく歩いたものである。五日真夜中の十二時、ここは眠る所ではない。ありませんとばかりに京都駅を追い出された。仕方がないので駅前の芝生でゴロ寝。翌六日午前四時京都駅発。姫路にて宇部高同窓の友の所で一息つく。帰りに赤穂線を山陽線と間違えて九十円余けいに取られたのは残念。岡山、広島、宮島、岩国と見物して八日夕方我家

に無事到着。目出度し。

補足。(何でもよい事)

- 一、鏡光地では決して民家にとまろうとは思ふな。
- 一、一人旅はがむしやらにやるべし。
- 一、大きな駅でも小さなそれでもとめてくれないのがあ  
るから注意する事。
- 一、食い物については左程の心配はいらぬ。
- 一、見れる所は見れるだけ見る事である。
- 一、旅先でおくびにもパチンコしてもうけてやるうな  
んて考えぬ事。
- 一、二週向位の旅行なら着替は無用と思われる。
- 一、風呂に入つてやるうなんて考えぬ事。
- 一、列車の手洗場の水は飲まぬ事。
- 一、考へて行動するより、考へながら行動した方がよい。



## 詩 二 題

出 島 隆 夫

### 大いなる自然

ワングルの前に道はない

ワングルのうしろに道は出来る

ああ自然よ

ワングルをひとり立ちにさせた広大な自然よ

我らから目をはなさないで、守つて下さい

常にあなたの気魄を我々に与えて下さい

未だ未熟な我々のために

今後のワングルの発展のために

### 回 顧

ワングル活動に精を出して

はや一年の月日は過ぎぬ

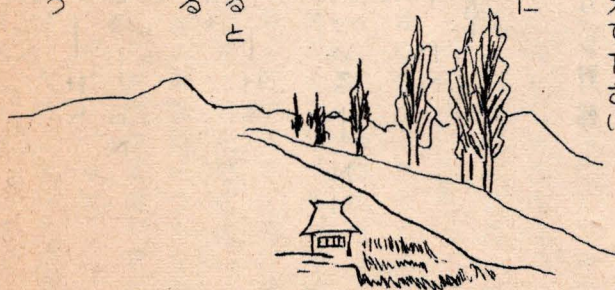
つらつらわが奥績をふりかえると

苦しかった事のみ思い出される

そうだ

苦の中から無を見い出そう。

苦しさを耐え、今後も頑張ろう



# 室 煙 喫

## 「アンケート」

一、最近大変シヨツクだったこと

白髪がふえた・俺廿年をとった奴あーT.D

マリリン・モンローの死を皆が騒ぐこと

—— M.F

雪崩で大の山男がコロリと昇天したこと

—— M.O

一、あなたが女だったら？

女よりも男を好むようになるであろう

—— N.S

男性無用論をぶつてであろう

—— O.S

断然ワングルの男性を恋人にもつ、そして

—— N.子

当然結婚 —— N.子

—— S.K.D

一、今やりたいこと

冬の標高の頂上で、大キジをうって、ナダ

シを起すこと —— 山の神

一、女（男）からそつと手を握られた時

さあ、相手によりますね —— K.N

その頬をじつとみる、そして握りかえす

—— 弱き男

一、マネキン人形にウインクされたら

顔面神経痛なら唇香にかかれ —— H.K

そのマネキン人形を持つて帰る —— S.N

一、女心 男心とかけて何と解く

雨に濡れた地蔵さん と解く

心は、冷たそうで冷たくない —— H.子

大魚 と解く

心は、迷がした時ほど、思いつめる —— N.H

月末の大安走り と解く

心は、買いかぶりば禁物 —— D.N

## 無責任な詩<sup>うた</sup>

イカレ野郎

私だけがあなたの山よ

いつも矢張りむかえませ

てなこといわれてそのきになつて

のこのこきたのが大間違

景色、天気はてんでだめ

荒れることだけ三人前、

ちよいと油断をしようものなら

びいとふかれて、ハイそれまでよ

畜生ふざけやかつて ——

△A 氏▽

一見七三に分け住い男。口の悪いのは山大一。ワンゲルの杉三衛門自分じゃなんでもやれるつもりでいるらしいが満足のものといえどヒトのおげあしをとることと下層のバアさんの自慢。

△B 氏▽

医の抜ケヒゴミ箱の様な男。どんなエサも文句を言わずドンドン詰め込むのせしりの着は心配するが本人はケロリ。目下一国鉄公安本部より指名手配中。彼はワンテラーではなくしてキセラであるから。

△C 氏▽

スタイリスト。丁何杯食べたと？本重はいくらあると？と聞いてまわるのが奴のくせ。もつとも女子部員がけむたがっているとか。又彼の女 あれこれの談議はささに聞きも

のというウワサ。

△D 氏▽

ボーイッシュエのスタイルが好きで大和までし二はいえだけないというのが日頃の持論。善舌家としての名声が高い。最近トサカにくる二が夏すぎて善舌家の地位を引退したともしらしている。

# 私の横顔



△E 氏▽

ワンゲル中もつもしやれっけがあつて、もつともモチはい男。それならそれで山へでもセッセと遣えばよいものをそれもおやりやらないモノアサ。講議はヒマ、リーベいはいときてんだからやればなんでもできるんだがね。そつそう力がないっていったっけ。

△F 氏▽

ワンゲルきつての料理の名人。女柱が戻るほどの腕前。ポロシヤツに浪人悟スタイルはとも二十代とは思えません。最上教生でありながら、二まめに竹く態度は尊敬にあたいする。本人曰く「サイですかし」。

△G 氏▽

さてドンジリに差えしは二のルームの御大といわれるあつしのことなんであるか、口はうるさいくらい出すが、ちつとも手を出さないとモツペラの評判通りのセミ山男。あれで口さえ出さなければおえとの下愚評しきり。ワンゲル中C調では第一級人物。

用語紹介(俗語及び略語)

アゴ|| 疲れる。オカ|| 悪官。ロケ|| 死ぬ。マクレル|| 二る。マク|| 天幕。シゴク|| 鍛える。カマス|| おどかす。ホキル|| 恐ろしがる。

# 卒業を前にして

未谷 正則

ワンゲル。という名が山口大学に誕生致しましたのは、昨年の丁度今頃だったかと記憶しております。

一年間の歩みは、夏くの舌難との戦いでありました。充分の装備もなかつたにも阿らず、今日こうしてその名を全学のものにしたのは、二、三年生を中必とした者さんのお蔭だと感謝の念で一杯です。

思えば昨年十二月、ウィーナスに於て結成を見て以来、四月のリーダー養成強化合宿、六月の大山、そして夏休みの能登半無遠征をピークに、十一月の中四回合宿合宿と、回を重ねると共にその成長は着しいものがありました。

小生に例する限りは、二の一年間ワンゲルの一部員として行動してきたことは、夏かれ少なかれ学生生活の満足と充実とを感ずるのであります。

人は、それぞれの個人生活を持つと共に、反面社会の一員としての団体生活を余儀なくされております。そ

してその人の人格というものは、この団体生活の中にありはじめその芽を育てるのであり、成長するものであると思ふのであります。

人格形成の基本要素は、協調性と忍耐力であります。よう。人間の魅力のある人程、忍耐強く寛大であります。よう。

ワンゲルでのこの一年間は、少なからずこの二つのものを与えてくれました。それが完全なものではないにしても、その萌芽とも云うべきものは有難いものです。

昨年三月、二の四年阿暗いヴェールでつつんでくれた山口の街、山口大学、そしてワンゲルを去るにあたり、いつまでもこの忍耐力を協調性という精神物は宝物を持ったことを誇りとして、社会の荒波に耐えようと思つております。

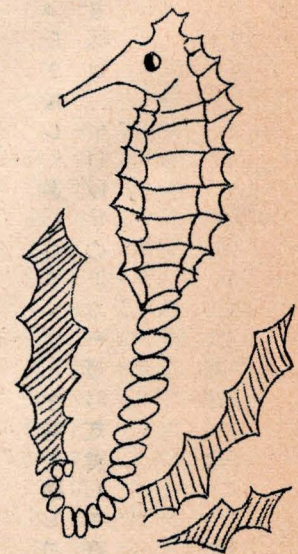
ワンゲルの首領と共に、有意義な生活が送れたことをくり返し感謝致します。

どうぞこれから先も山・大ワングエルが偉大なる肉体的  
鍛練の場であると共に、精神修養の場でありますよう  
、将乘入部してくる後輩のため、今一尺の良き正史と伝  
説とを讀み直して下さい。

最後に皆様の健康と幸せを祈りつつ筆を置きます。

## 有意義だったワングエル生活

加治 忠勝



一年足らずのワングエル生活もいよいよ終盤に近づいた。  
かえりみれば感慨無量である。私がワングエルを知ったの  
は三年の悠り頃であった。自然を愛し旅を愛する者十数  
名が集り結成準備会が開かれた。その中には山登りに関  
してはベテランらしき人もいたが私はまだ初學者であ  
る。しかし老いも若きもワングエルでは全一年生であろ  
う。いよいよ春休から活動が始まった。新部員を迎えるに  
当って強化ワングエルが鳳凰山で行なわれた。自分として  
は始めての大きなりエックへもつとも今からみると自分  
のが一番小さい旅だが、を背負われ、はたして生きて  
（？）山頂に到着できるだろうかと不安になった。し

かしどうにか登った山頂の強い風に汗を冷しつつ、  
あれば寒ありしとはこのことだとの感じを強めた。又そ  
の食事の美味しさは下界の俗人（？）にはどうてい分る  
まい。兎も角これが私のワングエル生活の最初である。新  
学部と共に新部員も集り女性陣も混りワングエルも大冢旅  
にむかった。

新部員歓迎ワングエルも抜ワングエル、大山ワングエル、能  
登立山ワングエルと次々と参加した。なかでも私が一往志  
れぬ思ひ出となつたのは能登立山ワングエルである。就  
版もどうやら夫り充実（？）し、正装持で参加した。私は  
A班一人曰く、「どうでもエエ班」といふ話があった。この

班にはフアイトのかままりといった人が多く、このかよゆき男姓をひきずるが如くりードして行く。とりわけFというオツチマンへ失礼か、かよゆき我輩の存在にはかまゆすハイピッチでとばす。彼の、「フアイト」の言葉に身をふるわせ吾は黙してゆかん、何をか又語るべき、である。能登半島ワングルではテント生活にも慣れ、七日間に渡る共同生活でいかに共同生活が楽しいものであるか教えられた。大いに歩き、大いにタベリ、大いに食った。お互に気心も知れ腹食を共にして仲間と金沢で別れ私達五名は立山に登った。

この旅にいろんなワングルに参加してきたが過ぎてみれば長い旅で短かった大學生活の経験を締めく、つて呉れたのはワングル生活である。私個人としてはYUWVには河ら貢献する所はなかつた。むしろ和魔となつたてあるう。しかしワングル生活は私に教くの良き仲間を手文、未知の世界を導き、自然への憧憬を深めて呉れた。そして能登ワングルでは共同生活と云うものがいかに楽しい有意味なるものかを教えて呉れた。

この旅に精神的、肉体的に無形の何物かを与えて呉れたYUWVを去るに当り私なりの愚言をはかしてもらおう。

YUWVは創立以来若竹の如く、又成長盛りの中学生が背丈だけぐんぐん伸びる様に発展して来、半年たらず

で正式の部としても認められた。これはいわば直線的な成長の面の成長であろう。一応のウチとしての原型は完成した。そこでこれから一歩充実した発展を期する為には、今までの様に一面的なものでなく廣の面への発展こそは人間の面でも目的地決定の面でも必要であろう。唯単に物質登山内は激でもなく又山岳部の危険なヒロイズムでもない。所謂母なる大地に降りそこから人間形成の途に役立つ健全なワングル活動である事を願います。

殊聖政風世蕙の辭世の句。「激に病夢は枯野をかけるめぐる」と歌い、若山牧水が「幾山河越えさりゆけばさみしさのはてなむ国を今日も忘れゆく」と詠じた様な興致を想し、自然を愛した怒も又一興だろう。しかし現存のせちがらいい世の中では鬼角個人主義的な生き方が多い様である。この様な時においてこそ本當にワングルの共同(団体)生活の意義は一歩大切なものとなるであろう。

短い期間だったが楽しく過したワングル生活を懐かしつつ、拙い一文を記し、YUWVのより一歩の充実した発展を期す。





秋吉須佐

珍道中

土井 洋

腹が立ってくる。僕の相棒であり愛すべき友、赤星はこれが最初の活動で最初のうちは大先輩である僕の言うことを長く聞く。初めのうちは、である。さて、大田に五時に着き、絵堂に向つた。途中、曰が暮れて坂登をちよつと行った所でテントを張ろうとした。リングをかじり

秋吉台で皆と別れて、いよいよ二人だけのワンデルングである。それはまさに十月十八日午後三時であつた。僕達は、まず大田に向つた。途中皆の乗ったバスとすれ違つた。皆は涼しそうにしてゐるのに、なぜ僕達は三十キロに亘り荷物をお背負つて歩かなければならぬのか。無性に

ながら細み立てていたが、紐がなひのに気がついた。僕達は愕然としたが絶望はしなかつた。ともすればちよつたみかち友氣持をムキ打つて、また暗い中を絵堂に向つた。(すこしオーバな表現になつてきた。)

山の道を二人だけで黙々と歩くと、人生の空しさかひしひと胸に迫る。山の上から絵堂の燈が見えた時はうれしかつた。そこで紐を買い、橋の下にテントを張つて今日一日の活動は終つた。翌朝、橋の上を通る牛によつて目が覚めた。今日の子定は、萩まで行くことである。明木に行くまでは車道を通るので、車がほこりをまつて行き去るのには、肉口した。明木に十二時に着き食堂で昼食を取り、(へこん友ハズではなかつたが)

それから、旧道の山道を通つた。これからは快溜な旅であつた。途中頂上にトンネルがありそのトンネルを抜けると、雪国ならぬ萩の町が見えてきた。ともすればへたはりかちな愛すべき友、赤星を元気づけ、(ここで土井君はええかつこうをする。)萩駅に午後三時に着いた。ここで、家に、友に、葉書を出し、休む間もなく、萩の町横断にかかつた。戯け決でテントを張るつもりであつたのでかなり急いだ。町のみんながふりがえる。そんな気のする二人であつたが、六時頃つと目的地に着いた。そこには子供達が十人ばかり遊んでいた。そこで僕達は彼等と悪意になるために、秋吉で先輩から、鏡刑にもら

ったアメを分けてやつた。それまで「二んばに惹かれる」  
 テントを療つて。うんぬん……」と喋っていたお母さん  
 方も僕達を萩の石巻市民にしかねないような態度に突つ  
 た。「火をおびましょうか」と言われた時は、これは単  
 にアメをやったからではなく、僕という人間にぞつ二ん  
 ……ののではないかと、思わぬいではなかった。赤星とい  
 えは、もう放心状態の何もすることが出来ないので自分  
 一人が夕食の仕立をしなければならなかった。寝る時  
 になつて、僕の腹の調子が悪くなり、少々下痢ぎみの感  
 をもようしてきた。さつとく、尿管氏からあずかつた茶  
 の葉から一服飲んだのであるが、愛すべき友、赤星の忠  
 告によつて、それが下痢促進剤であるとわかつた時、思  
 わず笑い出さずにはいられた。『毒をよつて毒を  
 剋す』を地をいってわけであれが、そのためにかどうか  
 腹の調子が非常に良くなったとは幸いである。

彼の音を聞きながらぐつぐつすり眠り翌朝、八時に出発し  
 た。土井(地名)に行く途中、山道を通つたのであるが  
 そこで道に迷つてしまつた。山を登つたり降りたりした  
 ので僕達は完全に膝を痛めてしまつた。特に愛すべき友  
 赤星に至つては、かわいそうなぐらいであつた。彼は膝  
 をまくつて「はせにかかつた」と、心もちあかくなつた  
 のを僕に見せ、しきりに「かゆい」「かゆい」とばやいてい  
 たが、海岸通りに出た時、なおつていたのは不思議であ

る。やつこのことで八時頃横佐に着いたのであるが、愛  
 すべき友は膝が完全にボロボロになつて、もはや歩行が  
 困難であると僕は見こもり、石巻益田までのワンテレン  
 クは断念して、江崎で我々二人の活動は終つたのである  
 いろいろつまらない事を書いたが、江崎から山口まで  
 の無効乗車失敗などにいたつては書く必要はないであ  
 る。

- 十八日 秋吉(16・30)―太田(17・00)―絵堂(20
- ・08)―十九日 絵堂(8・45)―雲雀ヶ峠(10・45
- ―卯木(12・35)―萩(15・37)―越ヶ峯(17・52
- ―二十日 越ヶ峯(7・00)―奈古(9・06)―須
- 佐(17・43)

## ブラリブラブレ

小田 洋司

俺には三人の親分がいる。その一人は萩に入つて同室  
 三つを奴である。その男の名は弘中と言ふ。もう一人は  
 、現在同室である中村さんと言ふ二耳生の人である。こ  
 の三人でしばしば鳳雛山に登つたり、夜食に出たり、映  
 画を見に行つたり、奥に気がよく合ふ。

○月○日の日曜日にも、三人一緒で鳳雛山に行くこと

になつていた。その前日弘中と俺は既垂を見に行つて  
いた。寮に帰つて来たのは十一時過ぎだった様に思ふ。  
中村さんは他の二年生の人と何か相談しておられた。そ  
の相談の結果で、中村さんはアルバイト入ル事になり鳳  
岡山には行けなくなつてしまつた。その時、さつき別れ  
た弘中君が「中村さんタバコある」と入つて来た。この  
男は一年生のくせにタバコは飲むし、氣のいい所はある  
が遊んでばかりいる奴で、俺も奴のど二がいいのかわか  
らない。とにかく親友である、おもしろい事をよく言う  
明るい性質が、俺には好きなのかわからない。

ちよつと部屋に入つて来たのをこ水幸いと、俺達だけ計  
垂を乗りなおした。それで、長門峡を下つて萩に出るこ  
とにした。そう決定したのはもう一時は過ぎていた。

あくる日、俺達二人は朝飯を大急ぎで食つて支度を始  
めた。めしを食いながら、弘中が「朝飯なんて日曜日に  
か食つたことはいのに余り飽がすな。味わつて食わな  
きや。昨夜ちゆうよりは今朝になつて、救ゆきの計垂を左  
てるなんてむちやだ」とかさんとかぬかしていた。それ  
でちよつとかく食料その惣買ひ出しをすませ、出発するこ  
とにした。

出発まぎりに、中村さんが「叔までは相当あるからな  
なるべく急げよ。余り無理はするな。小田はワンゲルで  
きたえているからいい様な心だが、弘中がいることを

忘れるな」と注意した。この中村さんは下級生思ひのお  
もしろい人ど、寮のみんなから好かれていた。俺一人で  
はどちらでもなるが、弘中もついでくるのでは無理の出  
来ない。途中で夜になつてはと一般用意はけはして来た。  
二人共登山ぐつをはき、リツツクを背負ひ、駅につい  
たのは八時半頃であつた。こんな夜で我々は長く旅行す  
るけれど、弘中は初めてと思えて何かはずかしさな  
顔をしている。

その時奴が言つた。「おい君。八時〇〇分の下り列車  
は宮野行きじゃないか。次の駅で下りてどこへ行くつひ  
りだ。まさか短大に行つて飯盆炊けンするつもりじゃあ  
りかろう」。これには頭に来た。そこまでは計垂する時  
に気がつかぬかつた。次の列車は十時〇〇分である。こ  
れではちよつとおそすぎる。寮内係の放送で九時〇〇分  
の準備「しんじ」は長門派取に臨時停車すると言つた。  
準備券を貰つと二人で二百円換になるがまあいい。「し  
んじ」で行く事にした。何うの駅が大きければ、一駅南  
ぐらい準備券はつかないんだが。

「しんじ」は満員であつた。二人は洗面所の前に立つ  
ていた。そこには満員で動きのとれない車内売子が二人  
、奴の制服をつけて立っている。弘中はその二人をじっ  
と見つめている。それを覚えていると俺の方がはずかし  
くなる。男性心理として美人は見ちかろうがあんなにじろ



秋吉・須佐

珍道中

土井 洋

腹が立ってくる。僕の相棒であり愛すべき友、赤星はこれが最初の活動で最初のうちは大先輩である僕の言うことを長く聞く。初めのうちは、である。さて、大田に五時に着き、絵堂に向った。途中、曰が暮れて坂登をちよつと行った所でテントを張ろうとした。リングをかじり

秋吉台で皆と別れて、いよいよ二人だけのワンデルングである。それはまさに十月十八日午後三時であった。

僕達は、まず大田に向った。途中皆の乗ったバスとすれ違った。皆は涼しそうにしてゐるのに、なぜ僕達は三十キロに近い荷物をお背負って歩かなければならぬのか。無性に

ながら細み立てていたが、紐がなひのに気がついた。僕達は愕然としたが絶望はしなかつた。ともすればうち沈みかち友氣持をムキ打って、また暗い中を絵堂に向った。(すこしオーバな表現になつてきた。)

山の道を二人だけで黙々と歩くと、人生の空しさかひしひと胸に迫る。山の上から絵堂の燈が見えた時はうれしかつた。そこで紐を買い、橋の下にテントを張つて今日一日の活動は終つた。翌朝、橋の上を渡る牛によつて目が覚めた。今日の子定は、萩まで行くことである。明木に行くまでは車道を通るので、車がほこりをまつて行き去るのには、肉口した。明木に十二時に着き食堂で昼食を取り、へこんちハスではなかつたが、

それから、旧道の山道を通つた。これからは快溜五旅であつた。途中頂上にトンネルがありそのトンネルを抜けると、雪国ならぬ萩の町が見えてきた。ともすればへたはりかちな愛すべき友、赤星を元氣つけ、へこで土井君はええかつこうをする。萩駅に午後三時に着いた。ここで、家に、友に、葉書を出し、休む間もなく、萩の町横断にかかつた。戯け決でテントを張るつもりであつたのでかなり急いだ。町のみんながふりがえる。そんな気のする二人であつたが、六時頃つと目的地に着いた。そこには子供達が十人ばかり遊んでいた。そこで僕達は彼等と悪意になるために、秋吉で先輩から、鏡刑にもら

の地図の間がとんでゐる。その間の長いこと。歩いて歩いても二枚目の地図には出てこない。おまけは行楽着を乗せたバスが追い抜くと、ほにりが立って頭に乗せしきまう。それで川市は段々玄くなり水の流氷もゆつたりとしてくる。又この辺の景色という口にはあらぬされぬ美しさがある。水を満々とたたえ、鏡のごとく寂一つなく、夕もやの中で静かに水は下流へと流れて行く。山の形も今までは変つて消らかである。ぬぐらを指して飛んで行くのであるうか、からすが、何かおしどくに何うの山からこちらの側の山へと飛んでゆく。それを二入でじつと見ていた。弘中は又たバコヒ火をつけている。「おい疲れたのか」とはすぬると「何が疲れるもんか。君はんかに負けてたまるもんかこんだ。さあ出発出発。今のところ萩には七時頃着く様になつてんだらう。急ごうしなんて感傷つて、やりがえしてくる。萩まであと四キロと言ふところだ、とつぷり日が暮れてしまつた。川にそつて大きくカーブを切つたところだ目の前が開けられて、遠くに板汽車の鉄橋を渡る音が聞える。もう少しだと思つと、急に腹が減つて来た。「おい夕めしにするかしと弘中が言う。「じや萩の町の光が見える所で夕めしにしよ」と俺が言った。山口にゆけるバスヤトラックがひっきりなしに、まばゆい光で照らしながら猛スピードで通り抜ける。弘中が「見たぞ」と叫んだのは、

それから十分とたたはいうちであつた。「あそこに見える赤い光は鉄道の虚号にちがいない。あちらの空を穿てみる、町の光で明かるくはつてゐる。さあ、めしだめしだ。」星空の下の夕食も又格別であつた。うまいの甘んので、一口ほうばるごとに頬を突あつては笑う。萩に着いたのは三十分後の六時半であつた。俺もよく歩いて弘中もたいしたもんだ。さあ明日はいよいよ萩見物だ。早く萩美人とかに会いたい。

## 鳳湖山キャンピング

楠見 典子

自然の美しさに惹かれることは大好きな私である。とりわけ山に登つて、下界を見下す時の優越感的感情はなんとも言えないものである。その様は事が私をワンダーフォーゲルに入らせる動機となつたのである。五月中旬に強壯訓練も兼ねてキャンピングを鳳湖山にてやつた。これがこのサークルに入つて私の初参加である。なにしろ、私にとつてキャンピングとは生れ初めこの経験なので、ただ珍らしく何事も夢中であつた。私は元来、下手の糞好きの方で忍耐がななく、わずかに七百メートル位の鳳湖山でさえも肩にかかる荷物重量で頂上に着いた時には若しくは一歩も動けない位であつた。

ども、そこから一望のもとに見渡せる眼下の景色（こ  
 こに述べるに足りない風景）を見ていると羨れもふつ飛  
 んだ。それからすぐに夕食の仕度、白炊の樂しさを精爽  
 しながら白菜も人参も木ギもみむつた切り、飲立には  
 スキヤキとあつたが出来上りはごつた煮であつた。七時  
 頃、暗がりの中で飯盆を囲む夕食。男性の食欲の旺盛  
 さに今更ながら驚く。食後、キヤンアフアイヤーを囲ん  
 で美声を張り上げながら歌う。月朧がたいへん美しく、枝  
 々を照らしていた。翌朝早目に起き、膚に冷たく感じる  
 山朝の天気。中を雲海の美しさに目をみはりつつ散歩し  
 た。八時頃、西真綱に何う。この日も又、暑すぎる位の  
 上天気。汗をふきつ、何う、あまりの険しさに敵も出な  
 い。それでも頂上に達した時には何か困難な事を克服し



た様々満足感に浸った。少し  
 休憩の後、下山、途中で昼食  
 ガタパンとソーセイツ、それ  
 にコンテンズミルク。下りは  
 樂で自然、敵が口をついて出  
 る。五時頃、真綱山に別れを  
 惜しみつ、歸途についた。初  
 めでの争いので何か不安があ  
 ったが、楽しいキヤンプであ  
 った。

# 秋吉台調査

松本昇

秋吉台、秋芳河というのは山口県人は勿論我々も入學  
 以來なじんできた名所であり場所である。しかし、台上の  
 様子を知り、台上を自由口抜ける人は少ない。我ワシ  
 フォーゲル部に於ても殆んどいないだろう。そこで私  
 の台上を歩いた経験とそれから得た知識を少し書いてお  
 たい。私が台上を歩いたのは二度ほどであるがいずれも  
 目的は最大河であった。しかし、第一回目は青景に出  
 てしまい、二回目の時も少しぶん遠まわりをした。

秋吉台は大きく分けて三つである。我々が一般に秋吉  
 台といふところは東之台といふ。その北方に青景、水上  
 等の水田地帯をはさんで中の台があり、東之台の西方に  
 西之台がある。いずれも石灰岩が突出し典型なカルス  
 ト地形を呈している。博物館が調べたところによると三  
 万五千分の一より詳しい地図は出来てなく、五万分の一  
 の地図を拡大してつかっているとのことであった。観光  
 術にも学術的にも東之台が一番重要な場所である。専ら  
 家はその東之台を重要さの度合によつて、三つに分けて  
 いる。一番重要はところは博物館、龍蔵峯、(長者ヶ森

の方を伺いて左側に見える山、若竹山、冠山、地獄岳、大正河、帰り水を結び一帯である。

我々のさまよい歩きもこれに拠つて進めることにした。龍巖峯は野岡の都合でキャンセルし、若竹山から長者ヶ森に何った。いつからか一匹のワン君がお伴に加わっていた。彼の目的はザックの中のメザシにあるらしく、ザックをかついでいる人の彼からばかりついていく。冠山、地獄岳とこの辺までは全く順調に進んだのである。地獄岳を下る時、我々は真石ヶ岳へ大正河の西方に位置する小高い山をすぐ目の前の山だとばかり思つてその岳側をまわれば帰り水を通つて大正河に着くと悪い西側に下った。これがそもそも誤りのもとで、実は真石ヶ岳はもう一つ東側の山だったのである。行けども行けども、帰り水は見つからず、遂には水上が見えだしたので、方向を変えて道なき道を大正河の方へと歩きはじめたが、最後には身の丈以上もあるすすきと藪の中に迷ひこんで動けなくなつてしまつた。そこで私は道を探して一人で藪の中を出て松林の中に入り込んだのであるが、そこを小さな穴を見つけた。人が一人やつと通れる小さなものだったが相当深いようだった。親柱秋吉台には大小百前後の鍾乳洞が飛現されているそうだからおそらくその中の一つであろう。だが道は遂にみつからず、そこで昼食とびた。ワン君はメカシの頭をかりかりたべては

我々のにぎりをうらめしそうに見ていた。それから道に出るためひまどり越えよろしく五十米以上もある急斜面を這いおりて河原谷に出てやつと大正河にたどり着くとができた。そこでは誰のいないのを幸い、口へで洞内見物とシヤレこんだのはよかつたが、洞を出ようとする時がイドさんに見つかり一人につき金五十円を要求されたが、日頃の凶々しさをこころとばかり發揮してとう見逃してもらつたことに成功、その金でジュースを飲んだ。ほんとうまかつたことか、帰りには道をまちがえることもなく、大正河へ帰り水へ長者ヶ森へ秋芳河と最長コースをとり二時間余で帰ることが出来た。

我々が道に迷つたのは地図の見方を誤つたためではあるが、早く大正河までの道標を立てて、誰ごもあやまりなく行けるようにしたいものだ。

*At any rate Abiyasaki Plateau is wonderful !!*

# 北アルプス

堺原直毅

俺は今夏、山野郎がうよくくしているという上高地へ行った。以下、初心者の語るアルプス雅感が述べられている。左様心得て讀まれるとよからう。それから小庄の

美感以上に、小庄に悪知恵を吹き込んでくれた者が悪友の煽動のあつたことを村言しておきたい。

上高地の表玄関ともいふべき松本駅の差路に心の平靜を乱されてより、さすがの庵も、何かしら動揺の連続だった。バスがよくゆれたのもそれに輪をかけた。

岩壁すれ／＼に通つた釜トンネルを抜け、バスが角をまわつた次の瞬間、大正池が穂高の峰々を映して、我々の目に飛び込んでくる。

この時初めて上高地へ来た。アルプスへやって来たという美感が湧く。都会のミーチャン、ハーチャンはこの時に感激に悲鳴をあげ、ベテランの山野郎は平然と山を見すており、そして、初心者は少々の武者腰いと興奮とを禁じえなかった。上高地での最の日、俺はミーチャン、ハーチャンの様に感激した。

河童橋を渡り、穂高の峰々を半ばつかれたように昇入り、梓川の水の冷に驚き、夜は星の輝きの美しさ、夏々とどびえ、我を丘せんばかりの山に、俺はここにやつて来て良かったと思つた。そして、こんな二人間がいなければ我が妻叔の曰と思つただろう。

「こんな畜生／＼。俺はどうしてこんな目に苦しい思いをして山へ登らねばならんのだろう。それまで肩らつて歩いてきたガメテはサアにつめこ、汗をだら／＼流して歩いた。いや、走つたと言つた方が早い。俺の目は、わず

か二米あまり先の、木の根っこのある湿つた道しかみつけていかなかった。後からは、しきりとシツタ激励の音が飛んできた。頭がフテ／＼してきた。俺は必死だった。悲壮感のみなきつたワンピツチ目はやがて水窟で途つたが、天気の良い日にむせこんな苦しみをかぶればならないのか、そんなことを考へる余裕はなかった。とにかく、登ることしか頭にはなかった。

そんな思いをしながらも、稜線に出て、周囲の景観に目をみはる時には、「プラホー」が出てくる。「苦しいしなんて単語はないような顔をして、キユウリをかじつたのもその時だった。

五ヶ岳の珠林限界は美しく濃にすじを描き、巖盤の噴煙も、沢の雪渓も、浮ぶ白雲も、そして、そこいらの石ころもはいかにも、すべて我が友だった。そして拔悪友を鬼て、山岳部で伊達に冷飯は食つていかにぬいと思つた。その水から屋根通しをやつたが、こいつはスリルがあつて面白い。ゆつとも腹前の若しか鬼甘いことにした。下の方はかりみていると、落ちてゆかないと思つた。下の方、驚動始に落ち込まないと服らない。落ちて喜ぶのは、新圃社と葬儀屋くらいだからやめた。そして俺は思つた。「世の中は物好きは奴が深山あるものだ」と。雨の降るのに登つたり、夏の暑いのに雪渓を愛したり命をかけて懸しても冷たい顔をしている岩にいどんだ

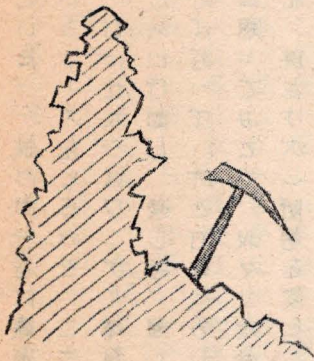


り、さらにはオロクになる奴もいるんだから。

「だいだい、恋人の胸に抱かれて死んでゆく奴は、奴はそれで本望だなどという態度があるのだから、山も栗も恋人である。そして、さらにわからないのが人前という魔物である。物好きを通りこした奴である。」

「山があるから登る」と言つて脚杖があられたが、「山がなかつたら……」と悪く思つてみた。よくもまあ、あきめせずでつかい荷物をついで、まづいエサをつついで、神と一纏に歩くもんだ。そしてキジの語をしてはニヤ／＼し、美人が通れば色めきたち、そして、お花畑で寝れば、恋人がいればいいなあと思ひ、夕焼をみればセントナになる奴が、唐況如何では契に頼もしい働きをしてくれるのだから不感戴である。

そして奴らをどんなにした山、その山の持つ魅力、魔は尺腰では計り切れなかつた。誰庵の見たアルプスは美しく、険しいもの、そして荘厳さと雄々しさを兼ね備へたものだった。



## 九重紀行

世 島 隆 夫

今回のフリーワンは僕にとつて忘れられないものとなるであろう。それはすつとさかのぼつて七月十四日、原、木田両君が僕の目覚めに訪れたときから始まるのである。十四日は拙宅に泊り翌十五日早朝町を発ち、小倉で高木兄と合流し、汽車は四人を乗せて九里へと向かつて行つたのである。

途中大分で乗換への急下り、わずかばかりの時間を利用して、市灯は特に見るべき所がなかつたので、チバート見物、相変らず一、二人目を見張るメツチエンがいるが閑象ない。僕には九里という愛しい人が、早く来ないと淋しいの。と云わんばかりに待ちこがれているからである。ほんとなく心もはずむ。

大分を後にしてススを全身にあびながら汽車は進み、やがて豊後中村に到着。この頃から雨が降つたりやんだり結果的に見るとこれが翌日僕の身の上になりかかった出来事の起る所であつたかもしれない。

此処から随湯へはバスで行つたが、途中不通箇所があつたため、三十分程テクリ五時二十五分着く。ここは山

奥の温泉らしく樽楯に富んでいた。一敏の旅行者は鏡光を主目録とし温泉で一泊というケリ入をとるので、ここらで一泊といふところだが、なにせ我々はワンゲル部員、家の台所もキジ湯も戻らと共に行動し、察しお、惹しみをわからあつてゐる。こんが悩まばい所で泊れるもんか、くそくらえてんだ、とは思つておも、我々は幾分後髪を引かれる思いで、夫礼、僕だけが、所帯を袋にしてキヤンアサイドである九大山の家へと何かつて行つた。翌十六日朝五時に起床、朝食をすませる頃まではまだ雨が降つていざかつたが、霧が怒り、九時九大山の家を出発する頃より雨も本格的に降り始めた。故ノ尹に達するゆすか一時雨の間で、股から下はびつしよりぬれた天ボコが肌になつたりくつつく。上半身はヤツケを道して着すじからしとしとつたわつてくるのが感じられるようになった。尿原、未雨前君はボコノヨに身を包み懸々たるものだ。叔らがうらやましい。

ここ数ノ尹でしばらく休憩。はるか前方を見わたすと霧がすつぽり沓掛山を覆つてむんとはく無気味な存在である。このような茶峠の下で沓掛山をやつとの思いで征服し、屋柱山を左手に見る頃から全身濡れ、雨がしお込み、いくら精力の体とは言え熱気が次第に蒸発し、飛走寸前の状態にまで陥つてしまつた。さらにこれに輪をかけるように九重分水のあたりで道に迷つてしまつたか

ら、さあ大変、曇りは最高度に達するし、気は変に打る。左下界に降りたい一念だけである。全く車中での期待を雨で覆切られてしまつた。

この指い、／＼ 雨めが！

僕はその時の実感を紙面に十分描写しえないが、心の実感に永久にとどめておきたい。

## たのしくやねこかつた日

富田 雅子

今日はこの世にオギヤアと生を受けて初めてのキヤンア// 山口の片隅に独り我意を得たりとテんと薦えて見返つてゐる方候、誰かさん曰く、〃ちやち山さ〃

それでも小さむ乙女の　はキドキド、井の中の蛙はらぬカールは何でも見こやろう。知つてやろうごうきうき。オニエーのキヤラパン以外は全部借用証書付きの想岳に身をかため、恰好だけはどろろにかこうにか、つけていざ出発。例の如く五層時雨へいちゃ失礼、これは本島の事、山口時雨にて正確？に第一歩を踏み出した。小さむ背に小さむサツクが右に左に、上下に跳ねている。愉快指数九九、九九……。田舎者の誰かさんは至つて

脚が犬夫、この時とばかりサツグに真けはいように股を振り振り前進へタノモシキカナノ

山の中腹にかかれば全鼻息も荒く、最初の景気は何処へやら、ろくに口もきかない。鬼むらぬじりターの吾ぬ商にと十分歩けば十分休憩、二水程桑な登山があるだろうか？それでも尚且つ不ミアシを履直へ？とさせたら若き男性がいる。弱きもの汝の名は男なりとはいやはや……。その肉元気な仲間が頂上を前に屬つきたる小羊を待つて必死らかに語り合っている頃、下から天にも届けとへもつとも山の上なら少しは近いけれど、雷が逆上して落ちて来た。勿理的觀念上、落ちて来るものは上からとはかり思っていた紋のガール、此処で一つの驚異的発見。そこから雷木ヤジにとやされて水懸に着いたのが何と日寸前。そこでじりター、流れる様を并走でもって教訓を左れ給う。何にも知らぬこのガール、なるへそごもつとも只、頭の下るのみへ奮起でもないに。それからてんやわんやで夕食へ芳しい？香りに去暗がりの中に真つ白い御飯を想い浮べてを肴ませ、巨んの申し訳程度の火をともし、合唱ならぬ道徳的発声練習、如何に如何に。それでも氣しく通し三数時間、へ今日は大変お疲れさまとテントにもぐり込み、後ば何にも知りません。只、憂心抱の悪いベットと寒さのみ、心ならずして、身を以って知る。彼のがール、何時もの如

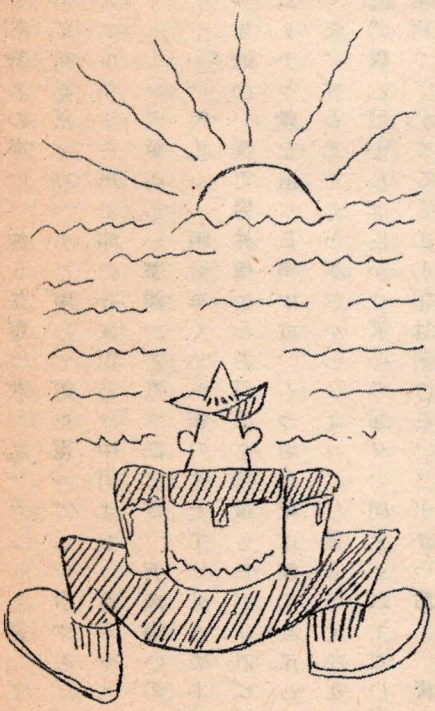
く何時もの様に、独り空想に耽ける。テントを通してそれと判る月をみつめて果して何を想っていた筈やら。中矢にかかっ三月と神のみを知る。仲間ももう皆スヤスヤ……。可愛らしい寝顔へと想っただけ、突際暗いので……。矢礼、朝は早くから雀のさえずりばらぬお喋りを始め、彼で男性軍からお目玉を真載した。けれどテントから腹を出した頃には、もうお日様は高くまぶしかった。まるでめぐらが穴からひよっこり頭をのぞかせた時の様に目をしばたかせ下らの面々、何とも云えない情緒有り。かくして山の朝は明けた。これから雷 紙走に覆るのである。若いエネルギーはザツクをものともしない風である。道中、花を見ては疾を履し、鳥にも心を驚かさず、せ、らぎをみては想い入るへて女の感傷、そうこうしている内に、も中腹、皆、汗タタタ、もうとこもいけませんと荷物を投げ出し、舌を出してハイハイ息をすること、し・ば・し・あ、きつい、例の脚に自信のある誰かさんも、ここ此処に至っては、皆と仲良く杖を並べてうち死に、脚を投げ出したの緊急会議、蕭々一致で手ぶらで山登りとはなりにけり。食糧だけ持って依然元気を出したのは――。(人間の現金さで例の井の中のがール身をもつて認識) やつとの悪いで頂上を極めて、感歎も一しお、と想ったの必末の河、生きるとはこうも面白いものか。景色よりも食い気とは

（幻滅を感じちやう。）そこですべき事が終れば最早や用はなし、やがて一人降り二人降り、その足の速いこと／＼。重い荷もなんとなく軽くなり足は自然に疲勞む。鼻歌も口をついて出ようというもの。

溪流に沿って下り、途中、ささやかなる昼食。御上岳はA感、小さな口をあーんと開けた瞬間、チャンズとばかりある新緑溢しさせニトルマン、ハイ、パチリ。人間食べる時その本性を暴露すとは（ムネンナリ／＼してやられたか）あまり女性のアライドを傷つけないでよね。お腹もくちくちればハイ、ソレマテヨとはゆかず、現実には冷く、歩け抜けでやっとなバス道路／＼そこで又一騒動ノバスに乗ろう。いや、ダメダメ、抜け抜け。ワイワイガヤガヤ。結局、バスにも見放されて残るは唯一つ、歩くのみ。白い埃っぽい無稽の道は匝々と続く（あ、無稽）オエエーのキマラバンも何のその、聖さの丹、おまけにテリケートは足はもう嫌と、あっちこち、こっちでもふくみつゝ、果ては血の痰まで流す止末。いよいよいけません。（實際、ガシラにくるぬ。）やっとな降り着いた時には足はもうホント、大根そのもの（イヤーネ）、黙々とひたり、みぎと交互に引出される足、感覚はとつくの昔に家出ならぬ足出とは、（本当、足手まとい）キマラバンはんとどうだっさいいさぬ。かくて世紀のワンテレンクも無事終了。何もかも、お・し・ま・い・

巨から、もうこれ以上は読まなくて結構。別にとりたてて書く事もない。どうも長い間馬鹿はおつき合い有難う御座居ました。御礼と同時に重ぬて御意告申し上げて置きます。もう本当に此処から先は読まなくて結構ですから。だからもう止めときなさい。悪いことは申しません。いい子だから私の言う事を素直に聞きなさい。

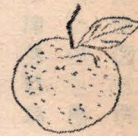
あ、あれ、あきれた貴方はまだ読んでるんですね。どうしてこう聞きわけのない人なのでしょう。あれ程止めたのに。もう止めます。何でいったって同じですものね。此処まで読んでみて如何ってことなかつたでしょう。だからいぬないこつちやない。貴方も随分ものすきですよ。人があれ程親切に忠告してあげたのに、どうもゴクロウサマ／＼。ハイドウモスイマセン！！



# 長門峽萩間ワンデルング



小山 薫



僕がここに右のような題を述文へ道に迷つた文へ文書  
さますが、お暇な方とその位の方も遠慮でしょうが、せ  
ひとは言わないけれども読んでみて下さい。

ワンゲルに入部して最初の試験として、長門峽萩間  
の踏破に参加した。キスリングはN氏から、シラフはO  
氏、ハンゴウ水筒は……と借りものであつても約二十  
五キロ歩いたのは杖が足であつた。

その日、後援隊として一行三名は行動した。長門峽の  
夕暮、ガチガチとキカラバンをひびかせ、しぐれの中を  
歩いた。すばらしいムードであつた。その時である。バ  
スともタクシーともわからない声で「もう飯がござる  
頃だぞ」。「アー腹へつた」。「すき焼が待つている  
」との腹からの聖なる声あり。やはり、皆考えていた幸  
は同じだつたのである。

所帯に圧迫感を覚える頃へ突如明日この調子で大文夫  
かなと脳裏をかすめたのだが、やみの中に尤が見えたの  
である。「ヤー出迎九御苦労」。「オソカッタナー」。「  
飯は」。「ござるぞ」。小屋の天井に帳中電燈を照ら

してシートを敷いて、ヤガで熟食。「あーうまい」とか  
「肉がない」とかの言葉がでる頃は、ワンゲルでは飯の  
終り時なのである。

その夜は、雨が降つて額にテントに冷たいキスとされ  
がら寝なければならなかつた。寒にわびしかつた。その  
時、隣にK氏が、「そのつぎそのつぎ……」

ヤー、起きているのか寝ているのか分らないような報告  
をいつたのである。夜はきつと、いつもハンゴウの底掃  
除の彼を引き受けているそのなを張り切つていたんだ  
らう。許してやるサ。

翌朝、いよいよビタミンドを求めて杖々は出発した。  
ハヤ考えていた事は、その晩のブタ汗の幸だつた。申し  
訳けない。ワンゲルは、自然と親しむ事にも、目的があ  
るのだが、この時、実に親しんだのは寒にお好み次第、  
大小いすれもある豆だったのである。一番の横綱は例の  
福除役二人、S<sub>1</sub>氏とK氏であつた。しむし、S<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>、K  
氏のような持欠刀には驚ろいた。炭どりの一年二人  
は十六キロ位の荷物にいじめられてついて行つた。

しかし、この長門峽萩間のワンデルングによつて自  
分の力、好き嫌、ブタ汁の依り方を知り、又、先輩の行  
動を見てのバッキング、テント設置等、大いに役に立ち  
以後の行動に自信が持てる様にもなつた。そして身体の  
割合に対して背のエンゲル系統の高いのも納得がいつた。

わけです。食べれば食べる程スタミナがつきます。皆さん、うまいものを炊つてうんと食べましょう。

この辺でハンゴの飯と〇〇風の〇を食べて、ハイそれまでよ。では縁があつたら又共に食べましょう。是は今腹がへつてゐるんです。

## 自転車に乗った渡り鳥

畑 田 茂 則

歩き疲れた渡り鳥は、近代兵器、自転車を手に入れた巖本城を出発した大坂城へ向かった。その日の夕方、博多の瀬見橋を見たのだ。昔では、とうていあり得ない事である。博多港の岸壁での炊飯は、野を歩く渡り鳥には奇妙な事であろうか。携燃の火の弱さに腹の玉が、やたらと泣いた。漁火を見この夕飯もてなものである。都市での野宿は物騒である。尊い上級生の家へ。寝ぐらの置つた渡り鳥は、ついに眠れず、早朝、関門をめざして飛び出した。夏の陽は、いじわるだ。むさだしの肌を容赦なく焼く。色白の鳥は一日一日と黒くなつて行つた。通路沿いの茶店に渡り鳥は魅せられた。くわしい肥田を待った渡り鳥は、道行く年ごろの美人に、ふらふらと、さも困つたように、「〇〇への道は」と話しける。

だいていひ女柱は、話のつてくる。そして、私も旅行したい。と、さも同行したり素振りである。そこに独り旅を承めると云つたら、

人がサイクリング車で前方を行く時、少しスピードを上げて、百メートル程追い抜く。奴はしやくにさわつたらしく、追いかけてくる。そして抜く。この事を繰り返してゐるうちに、話しかけてくる。そして独り旅の事を聞く。疲れが出ると、野に車を倒して、ごろ寝である。カモメが船のマストにとまるのと同じである。前方に小倉城が松林の中から雄姿をあらわす。工業都市のため、竹でつてゐる。知人を探すのは、本當に手向がかる。コレラの町へ門司についた時、やはり緊張した。コレラ発生のため使用禁止のピラが目に付く。知人の家で、飲み物を出された時、ワクチンを射つてなかつたので「大文夫」と云われても、近くの海、船を見ると、手にしたゴツプが濡れる。関門トンネルを出た時は、陽が傾いてしまつてゐた。海峡に立って、目近の大船の航行を見た時、コレラの海である事もたれた。

火の山公園には人出が少なくて、テントを張るのは夜半に近かつた。眼下に関門の夜景を見ながら、乾パンをかじつた。牙元で南たる象とライオンの鳴き声は、ここがジャンゲルでもあるかのように錯覚した。宇部まわりりで部に着いた時には、友人からもらったシノー入は、

なくなつていた。それ程、酷暑だった。長沢池には、足を止められた。岸辺の老人に話し寄り、明治維新の活躍者の旅を聞かされた。下松では、親切な青年を愛連隊と同遊したことは傑作であつた。岸壁で飯を炊いていた。すると彼が話しかけて来た。その時、ナタを手元に引き寄せて身構えたものだった。彼は外国航路の船員で、外国旅行を夜半まで聞かされ、心がおどつた。その夜は、彼の家に泊つた。出発に當つては、食料をもらい、悪気易々と天下の悪道、視界等のほこりの岸徳線へ挑んだ。

この向、無性に、ハンティングしたくなり道路上に愛車を飛び出し、狩猟場を探した。賜の森の中へかけ込んだ。ハンターは数分後、獲物もないのに上気嫌で森から出て来た。錦川の美しさに、暑さもあつて、泳ぎたくなつた。水泳パンツはない。しかし、人はいない。夜まで登んだ川に飛び込んだ。ほこりまみれの身体は、清められた。見ているのは愛車だけである。四・五枚の汚れシマツが洗われ、荒れ砂利の中に投げられた。昼飯を落ませる向に干いていた。錦帯橋の上でのランテプーは成功した。カメラの取り持つ縁。安カメラでも役に立つものだった。客番は観光の島、渡り船には関係なかった。広島に入った途端、パンクである。タマみに手さぐりでパンク修理をする。夜宿のいる所である。花火に引かれて、兼瀑記念公園に行く。そこがその夜の寝所となつた。先生の

上に大の字になり足に自転車と荷物から紐を結ぶ。自転車のサドルを靴にして寝た。近くをアベックが行く。もつと近くの花みに人の声がある。寝つきの悪かつたのは当然のこと朝食を依る折に、ヒツチハイカーに会う。中キズをかついで、色黒く疑けていた。旅旅看同士の気安さか。夕方彼がトラックに便乗したのを見とどけ、熊本での再会を約して分かれた。

バス停でのことである。疲れと暑さで、長く入に休んでひる向に、眠つてしまつた。人声に起きて、何やら壁を見た。殺人看手配守真がはつてある。見れば見る程、自分だけ似ているのではないか、年頃もあまり変わらない。自転車に乗るが早いか、フルスピードでその場を抜け出した。しかし良く似たものだ。孤独を感じたのは、夕立時に、バス停でアベックと三人で、雨宿りした時である。彼らは、楽しそうに話している。その場におられなかつた。が外は土砂降りのため、それも出来なかつたのだ。独りじつとしていた。岡山から兵庫を一飛びに一日で大阪についた。その間百五十キロ余りである。大阪上にとどり着いたのは、夜半近くであつた。ここに全ては終つた。と思つた疲り鳥は、近くに釜ヶ崎があるとも知らないで、日吉丸気取で、橋上に仮寝したのである。時間過ぎを見ながら、そのまま寝てしまつたのである。起きてひつくり荷物はスツカラカン。残るは自転車のみ。

あの全ては終つたのだ。知人にあつても、ゆつれた土人  
のように色黒く焼けた顔と、あせにまみれた服装に誰で  
あるか分らないようなようすであつた。色々思ひ出深い  
幸ばかりだつた。筆舌につくせないものも<sup>多</sup>あつた。  
他人の親切特に同郷人の親切には感動した。隔りの旅行  
列車での旅行は何と味気がかつた事か。友よあけ。我々  
の山河に親しめ。遠距離には自販車を行を。やつて見よ  
さらば

全てが待つてゐる。

——終り——

## 北海道旅行記

鈴 木 杏 白

北海道と一口に言つても大変広い。その広い北海道を  
今年の夏、全日程十九日、日本の最北端、最東端を訪れ  
た。

雄阿寒岳登山。広大な原野と、雄大な自然を持つ北海道のすばらしさに目を見張りながら、全日程の半を消化した頃、阿寒湖畔についた。二日前より、雨が丁度本土の梅雨期の様に、しとしとと降つていた急、湖畔の停留所よりキャンブ場まで走つて行つた。雨にくすばり、中の曇が編はりのカーテンを透して見る様に、かすんで

見える様も、又一瞬ある物だつた。雨の止み間にテント設置、食事をすませ、早々と寝る事にした。ところが、夜半頃より、雨が本降りとなつた急、起き出して、ナイロニの風呂敷を、テントにおぶせる一幕もあつた。翌日には幸運にも、三日ぶりにからりと晴れた青空を見る事が出来た。

いよいよ、雄阿寒岳登山口に到着、山に入つて、阿寒湖に続いてゐる湖を横に見ながら行くと、下りてくる牧人の団体に出会つた。ハイヒール、靴靴をはいた連中だつた。それでなくこそ丸面雖も山道を、ハイヒールをばき、危かしい足どりで歩いてゐるのを見ると、思わず吹き出したくなつた。最初は、こんなかつこうを登山を<sup>し</sup>たのか、と思つていたが、しばらく行くと、太郎湖、次郎湖という果内の標識のある湖が、道の両側にあつたので、これを見に来たのだな、と納得された。両湖夫、ラソラと繁つた森の中にあり、木の葉隠れの大陽光線を、反射しつつ、青くよどんでゐる湖は、その名と相まつて何かロマンチックな思ひをかきたてられた。ここを過ぎると、周囲はただん原始林の杳相を呈し、至る所、大木が林立し、中には根本からぶつたおれて、行く手をはんでゐる物もあつた。又、所々に大岩がころがり、その間に丁度熊の住むに手頃な穴があるのを見ると、何だか今にもそこから、熊がにゅつと顔を出しはしないかと



いふ熱気味な感じであつた。善悪熊が出没したという二  
ユー大を新奥に詭んでいたので、尚の善悪熊感が増して  
いき、森をわたる風のさわく、という言にさ九、ギクッ  
とせざるを得なかつた。それに、道はずぐ登りにかかる  
のでなく、本山のふもとまで、二、三料近く、登つたり  
下りたりの連続であつた。途中何度も本山に登り始めた  
な、と思つたが、しばらく行くと、又下りとなると言つ  
た調子で、再三再四失望をくり返している内に、最初の  
元氣はどこ九やゆ、本山らしき登りにかかつた時は、必  
ずバテ氣味であつた。本山ともなると、坂はますます急  
となり、疲れも段々蓄積されだした。が兎も角、一の  
休憩所につき、無事先頭の辻を果した。ここからは交代  
して、しんがりを務めた僕は、一生懸命みんなについて  
行つた。しかし、途中、前を行くみんなの姿が、大変面  
白いかつこうなので一枚写しておこうと思つて、立止つ  
たのが運のつき、以後は、疲れがどつと出て、一歩一歩  
が大変苦しく、前との差はひろがるばかりだつた。少し  
登ると視界が開け、眼下に阿寒湖が見る事の出来る地奥  
に出た。雌阿寒岳を背景とした湖の姿は何か神秘的な感  
じをたゞよわせ、湖面を遊覧船がのろのろと進んでいる  
様子は、全く例九よりの美しいこであつた。さつそく一  
枚シャッターを切つたのはいいが、疲れもあつてあわ  
てたのか、キヤップをしたま、だつた。

はるか上方を仲間二人が登つて行くのがよくわかつた。  
た。黄色と赤色のナツプカックを持つた二人は  
見るに妙にはつきりとしていた。くねくと曲つた道は  
相当絶き、途中より道が薄のようになり、左右の工地より低く  
なつてきたので、又、見通しがきかなくなつた。それで  
道が二つに分れた地奥に出た時、どちらを行くべきか、  
しはし迷つたが、少し前、前の二人が、「道は左だ」と  
叫んだのを聞いた様な気がしたので、一歩左側をマーク  
して行くと、下りて来る人の声があるので、左側の道を行  
く事にした。少し行くと人に会い、彼等より道を確め  
て、それまでの不安を解消、後わずかと聞かれて、少し  
元氣が出て来た。頂上に近くにしたがつてこの岩の密生  
している所となつた。その苔のジュータンの上を、キャ  
ラバンでさくく、と踏んで行くと、一きわ高い岩場とな  
つており、そこを登ると頂上だつた。仲間の二人はもう  
十分位前に着いていたらしい。彼等の他に先客が五人組  
いた。ここから下を見下すと、白煙を吹き上げる雌阿寒  
が左手に見え、出発時のキャンプ場をも見おろす事が出  
来た。残して来た友人が、今何をしてゐるか等話しなが  
ら、ついに、大声で彼を呼んでみることにした。声が遠  
く流れ、反射して返ってくる山々は、無性に人懐きさま  
おほ九させた。山の下では汗はむ程だつたが、さすがに  
山頂は風がきつく寒くなつたので、急いで吾のジュータ

ンの上に降り、昼食をとった。山頂のにぎり飯も又格別  
 一時阿程の山頂での時直は全くすばらしかった。今は無  
 住となつていたが、白ペンキの觀測所らしき建物、馬厩  
 の山々、眼下に開ける雄大な眺めは、人間の力の微々た  
 る手を思わせるに充分であつた。帰りは、行きの方の半分位  
 で下山してしまつた。登山口よりキヤンプ場までの帰り  
 道は、足を引きずる様にして歩いていた三人にとつて、  
 倍にも三倍にも長く感じられた。

この登山より、いかに苦しくても、皆と行動を共にす  
 る事、歩調に緩急の差をつけぬ事等、痛切に感じた。

終  
 リ

『詩』 山に何つて立つ

二年

T・D

ああ、いつみても雄大だ  
 あの頂き、あの稜線  
 冬山、夏山を向わず  
 征服の衝動にかられるのは  
 この雄大さのためだらう。  
 いや、山をアタックする勇氣は  
 人間の苦痛をも除いてしまふ。



えびのにて

T・F

米雨が冷たい  
 霧がサーと流れる  
 霧の中から人がきび出る  
 歌々と登る  
 すぼらしく紅葉した木の下で  
 日の光とまろがえて  
 思ひす上をみる  
 すでに三十分経過していた。



# 中・四国大学合ワんに参加して

堺原 直 蔵

バスがトンネルを通り抜ける毎に一段と荒涼たる風景が展開し、舞う雪に思わず体を固くしたのは目的地葦山高原を一時向座かり前にした頂であつた。車窓に展開する光景の中の白いものの姿に車中の興奮もいつしか沈黙に変わっていった。バスは誰も通らぬ照い道路を走り続けていくのだった。

あわたたしい準備でなんとか恰好をつけて車中の人となつたのは夜の十時を三十分分まわっていた。それから小郡で待ち合わせ、久奈氏を含めてオールメンバーは二・〇二分、沈黙の歌を後に岡山へ向つた。

岡山の暖かい日ざしにセーターの一枚もはき取り、晴れがましい気持ちで葦山高原へとバスに乗つたのであつた。

寒風が吹き抜けてゆき、雪の降る中で形通りのあいさつとお歌にリーダー紹介とがあり、盛大とはおせじにも言えない席会式は二十分たらずで終つた。参加十校、百五十人も寒さのため萎縮しがちだった。その夜はパーテ

ー毎のミーティングで終つたかたどりーター班は運管上行動上の打合せが十一時すぎまで続いた。

二十四日、冷気を煙わして朝の体操が始まる。昨夜の予想は嘘しくもはずれ快晴、晴折、大山も眺められ、今日歩く山々は手に取る様にみえた。

二つ三つのパーティが合併して、七つのコースに分れ、各々葦山高原をあとに新雪の山道を歩きまわつたのだつた。

空に星が輝く頂、真火かなされ、キヤンプファイヤーが始まつた。ひてつくような寒さの中でのファイヤーは何かもうひとつ盛りあがらず、阿波踊りが興をこぞつた。二十五日、山を去る日、それはすべてが楽しく懐しい。され、自然の美しさを認識する時である。

今度の中四国合ワんが合ワん参加の始めてだから合ワん自体の反省、感想よりも山大ワんケルからみた他校のワんケルという点に重きがかけられたのはやむを得ない所であらう。

まずここにきて、山大のワんケルの性格がより明確に現われてきたといふことである。

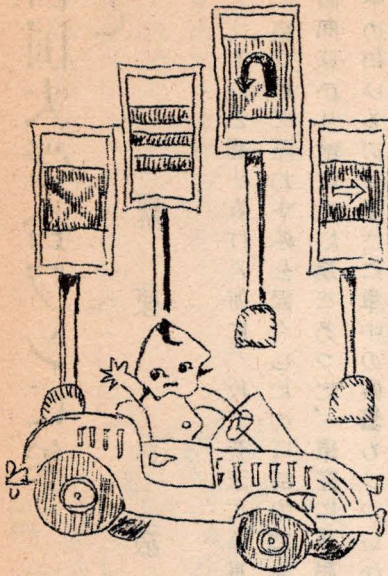
それは他校のワんケルの有り方や方向を知るに及んで、今まで落んでいたものか理出して来たのである。ここでワんケルは今後順調に発展をこけるならば、立派なワんケル活動が行いけるといふ目安がある程度ついたといえ

よう。それだけの自覚をもつ必要がある。ららやましく  
 思つた奥に部員向の信頼度が極めて高いということ  
 男女向員向のフランクな交わりという奥があげられる。  
 これらも部活動というひとつのさすなを通して、注れて  
 きた結果であるうと思われた。何々の行き、活動への参  
 加態及如何の向題であるう。

具體的な奥については運営の面、活動の面においても  
 多々学び取ることがありましたか、やはり部内部の充実  
 ということに尽きると思われました。

秋々も免服向上を目ざして、頑張つてゆこう。こうい  
 う気持ちを持つて帰山することが出来たのは何よりも喜ば  
 しいことであつたといふまじやう。

参加出来得なかつた人も今後広く他大学の人と交わり  
 視野を広くしてもらいたい。



## 小豆島

田畑 茂則

瀬戸内に浮かぶ小島、小豆島。

オリーブの香、吾を招く。

土庄に着きし吾、一瞬たじろく。

水くくワンテラー、自然を求めて、奥深く。

水くく道返し、山の上まで段々畑

前に後にバス、ハイヤー

銚子の港に行き着けど、はむるものは失せにけり

残るは観光カブレの店の並

羨しの原にたたすみて、一室に見る瀬戸の内。

遠くに涅槃の山の峯、眼下に見るは鏡の入江。

がけくワンテラー、寒霞溪は吾を呼ぶ。

並ぶし二軒のみやげ。

互いに競いて、客を引く、観光地のおろかさよ。

吾は去り、悪戯の中を行く。

野原の出て来て、吾を呼ぶ。

木に登りし親子猿、祖先を思ふ光景なりし。

自然に帰れし吾なれど、ラシオの音に興ざめず

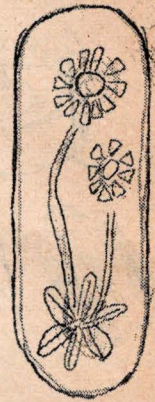
石門を行く吾に、もみじ葉手招きす。

自然に帰れし一瞬なれど、船の時刻に心は急ぐ。

草壁、坂手、船に乗り、遠くはるかに去り行く小島  
 夕陽にはえて、指別を端す。

# 裝備雜感

末國 弘司



無から有は生れない、とじう言葉がある。しかし我々の集りは、(絶對にはないが)無から生まれたものがある、という感じがせぬでもない。半年余りたつて振り返ってみると、多少の感慨は湧くものである。

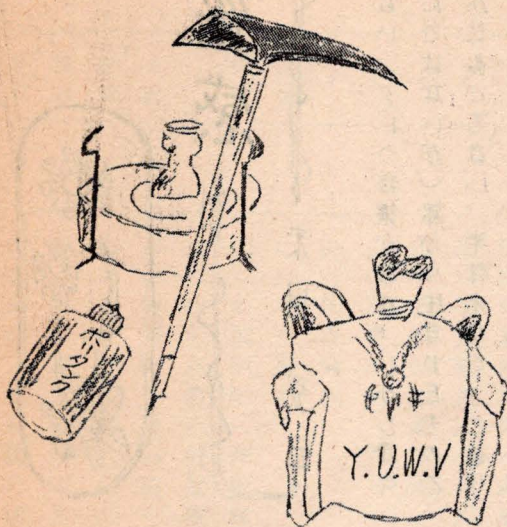
創立以来裝備面を担当し、又これからも仕された者として眺めれば又趣がある。自画自賛ではないが、金のない大学で金のない者が集つたサークルの半年の成果にしては、である。

ところで、今は大体に於て「集める仕事」の難かしさというものを今頃再認識してゐる次第である。「使つて」以上の「使わせる」事の困難さでもあるが。試みに諸君自身を考えてみよう。君は今迄に何回テント生活を経験しているかは知らないが、設置の地理的條件排水溝の廻り方、テントを張る順序、方向、地盤の硬石によるペグの送る方、打つ位置、角度、張り網の結ぶ方、更に櫛収

それらすべて正しく、迅速に出来る自信があるだろうか。その世の裝備に關してもすべて同様である。重そうに、みえて軽く、た、けばヘコムザツクに始まり、いさゝか雨と風があれば倒れるテントまで總て毛ノ互うまく使うのは容易ではない。大体、親からもうった毛ノさ之上手に使つてゐるかどうか不安なものである。二十キロ歩いてへばる足に至つては処置なしである。合宿に於いては毛ノの使ひ方によつて楽しくも苦しくもなる毛ノと認識されるがよかるうと思ふ。一登の武器でキジが多くとれるかよるかもし使ひ方一つである。台風の中でも假女(假氏)の夢を見ることかどさるかどうかも技術の問題である。今度の能登合宿に於て裝備の足りない兵を反省するのも大切であるが、準備したものも百歩使ひ切つたかどうかを反省する方がより重要であらうと思ふ。

毛ノを使つ事に附随して重要な事は「迅速」である。正しく使つたとしても、あまり時間がかかりすぎるのではこれ又落オである。スピードはどの速度によつてされる。ワンゲルの合宿にあつてはこの速度によつて行動範囲が設定される。これは能登合宿でかなり認識された事と思ふ。設置、エッセン、睡眠、櫛収これらすべて精度と迅速さが要求される。二の中で朝は特に、目前の毛ノを迅速に大量胃袋に移動させる技術が全員に要求される。これも毛ノの使ひ方如何による。

結論的に言えば、我々の合宿に於ける裝備面に關しては台着の規模、処理的條件、季節等によつて、必要な裝備の数は公式的に出てくる。それがどの程度までと云へ得るかは金と頭の向類である。後は兼めモノを參加者がどこまで使い切るかにかつてくる。この事は各部員頭に入れておく必要があろう。技術は他人が教えてくれる迄待つモノではない。自ら積極的に動かねば本當の技術はモノにできない。ではその方法は？ これも頭というモノの使い方一つである。とだけ言つておこらう。それでも分らない人があれば、裏口からおいで下さい。



ワンテラーにかかせない歌

畑 田 茂 則

一、腰のかたに

キジ鳴いて

今日もお山は日本橋

我らハンターせわしい朝日

しらかば林にキジか鳴く。

二、さあ行こうよ

手に鋏ニジメ持つて

二にまうれしい狩場

我等ハンター心もはずむ

はずむ心に身は軽い

これは、ワンテラーが朝夕、自然の要求に答えるための狩猟、特にキジを打ちに行くとき取らうものである。

肩に鉄砲ならぬ、スコップをかつぎ、友と隊を組んで、弄んでアナ林に入つて行く姿は、勇姿そのものである。身を終え、意気揚々と帰つて来る姿もまた、捨てがたいものである。

彼らが猫をしたところは禁猟区に指定されなければならぬ。



# 一に研究

## 二に研究!!

### 食事係

食事について編集委員より書いてくれとの事で書く事になつたのですが、僕が入部したのは五月の新人強化会者より秋吉台のセミナー迄であるのでそれについて書く事にしよう。

最初に物価について書きたいのですが、五月と十月と比べて見て大抵のものが少しづつ高くなつて来ましたが例えどもやむを得ずが五月頃百三円だったのが十月には五円に上つていた。これは例外かもしれないが、全般的に高くなつたのは確かです。値段は安らなくとも王ねぎジャガイモ等は柔くなり中の方は腐つていて半分位しか使えない事もあつた。次に向類となるのはおかず之余り変化のない事です。材料使用上の困難もあります。研究が足りないといふ事をつくづく痛感しました。夏の場合互例にとりますと、動物性蛋白質が少なかつた。材料として使うには使つたが、量が少ない、又干鰯を一度も使わなかつた事は大変失敗だつたと思います。六月の大山の時、肉を腐らして捨てたので貯蔵についても一月の研究が必要だと思ひます。カボチー計算は大まかでもかまわないからやるべきだと思ひます。

能登合宿献立表

日	31日	30日	29日	28日	27日	26日	
ふりかけ	みそ汁	ふりかけ	すまし汁	ふりかけ	味噌汁	カンパン	朝
	自由課題	リンゴ	パン、コーヒー	携帯食	サラダ、コーヒー	パン、ジャム	昼
	煮つけ	サバと野菜の	スタ汁	焼めし	ライスカレー	好き焼き	晩

又行く元々、その土地にあつた献立をやる必要から現地調達を行つていきますが、これからは、現地調達は出来る大やめて始めから買つて行くべきだと思ひます。このは調達に費する時間が増えたらならず行動の差支えに成ると思ひます。まだエサの向類は色々あります。二からのエサ類の大きいなる研究にゆだねたいと思ひます。

# 編集後記



今回は創刊号であつたため、無駄な努力が多く、編集委員運を必ませまじしが、無事二、三編集を終えました。ふりかえつてみますと、11月30日に部員等の原稿を締め切り、編集委員五名は所定のあわたりでしごのなかで、高重郎にひまを見つけてはとじこもり、慣れない編集を続けました。

よかて表があけ、新しい表がよつてきました。我々の周囲には依然重大な向類が山積したままである。牛放しで尾蘇に酔つてばかり居られなかつたのです。新年早々今度は所をかねて永沼邸で最後のしめくりをやりました。いろいろ不備、不注意な点がみつけれらると思ひますので、大いにご教示、ご鞭達下さるようお願いいたします。

最後に創刊号が発刊されましたことは、広大を始め他大学の影の援助と、部長及び部員一同のご天啓の賜と厚くお礼申し上げます。(出島隆夫)

編集はさほどきつかつたとは思いませんでしたが、カソトを書かせられたのには苦勞しました。編集の為に折角冬休みを早く切り上げてきたのに、何の事はない、ス

キーに行つた事もいい思ひ出と成るでしょう。(藤川) 寒い毎晩を長い間我々一同は良く頑張つたものと思ひ、皆んなの面白い原稿に引き込まれて、つい寒さを忘れてしまふ事も幾度となくあつたが、しかしみんなを體にまじめすぎて各自の生地が良く出ていなかつたのは残念でした。(高重昭雄)

全くイラダタシイ日々だつた。初めはノンキに秀えていたけれど毎晩カンヌメにされて四角のますに文字をつめこむことがこんなにつライなことではシラナク。自由な時阿がなくノート写しか全々出来なく困つた。(永沼) 生れて初めての編集。何の予備知識も持たない私にはとても良い経験になりました。最後に、他大学の協力御厚情、寄稿下さつた部員の皆様へ深く感謝し乍らペンを置かせて頂きます。(富田)

昭和三十八年二月一日 発行

発行所 山口市龜山山口大学経済学部構内

山口大学ワンダーフォーゲル部

編集者 永沼 嗣 朗

印刷 山口市印刷株式会社(電二五九)